

はらだみすき

はらだみすき

のボート 江國香織

小説 中島たけ子

これが私の選状

時がある

徳村弘

角田光代

等しいもの

少し

こはんは明日で待ってる

瀬尾まいこ

100連発

瀬尾まいこ

読書カルテ

ゆひ

人間の土地

ありがたう さようなら

あふみ

## 読書カルテとは

---

「説明する」ということが、得意ではありません。

たとえば、いま、自分がどこにいるかを説明するとき、目の前に何が見えて、どこに何があるか、というのを、なかなかうまく説明できません。

空は青くて、雲が少し浮いていて、足もとにはアリがいて、アイスクリームをほうばる女の子が歩いている。

なんていうふうに、「場所」の説明ではなく、「状況」や「状態」の説明をする思考になってしまいます。

それと同じように、読書感想文が得意ではありません。

物語のあらすじを追いつつ、感想を連ねていくというのが、うまくないのです。

なので、レビューにもなっていないし、感想文になっていない、という自負があります。

書いているのは、本を読むことで、思い出したり、発見したり、自分がどういう「状態」になったか、の記述です。

いくなれば、それは、レビューや読書感想文ではなく「カルテ」ではないか、と思います。

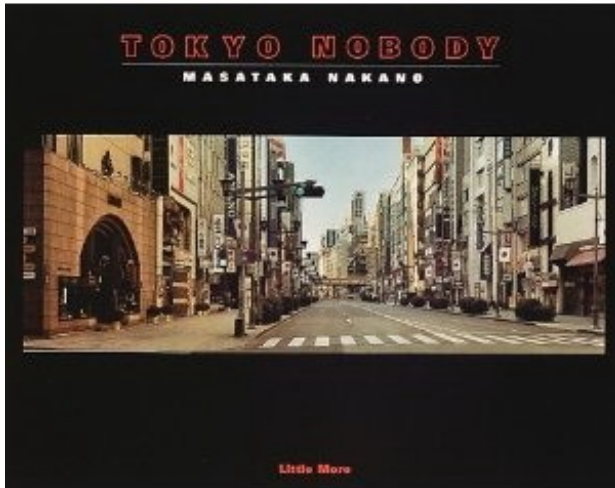
ということで、今まで書いてきたカルテを、まとめてみました。

処方箋は、ひとそれぞれ。

カルテが増えるたびに、追加していきたいと思います。

# 「TOKYO NOBODY」 中野正貴

---



ペーパーバック: 96ページ

出版社: リトルモア (2000/08)

言語 英語, 英語, 英語

**ISBN-10:** 4898150314

**ISBN-13:** 978-4898150313

発売日: 2000/08

商品の寸法: 26.9 x 21.1 cm

**誰** もいない東京の街の写真集。

新宿にも渋谷にも銀座にも人がいません。  
お正月に撮ったものが多いらしいのです。

誰もいない東京は、不思議です。  
いるものだと錯覚してた僕には衝撃的でした。

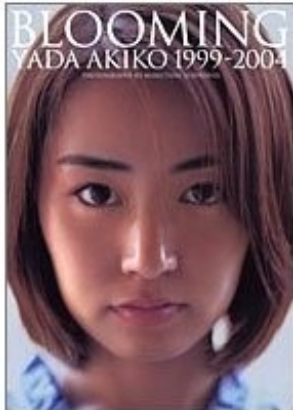
東京の街は人のためにあるんだなあ。

人がいないと街のぬくもりを感じない。  
東京の街はそういう感じ。それはたぶん、人工的に造られた街だからだろうな。  
でも、空にだけ、自然のぬくもりを感じたのでした。

March 22, 2005

# 「BLOOMING YADA AKIKO 1999-2004」

---



大型本: 288ページ

出版社: 集英社 (2005/3/29)

言語 日本語

**ISBN-10:** 4089070023

**ISBN-13:** 978-4089070024

発売日 : 2005/3/29

商品の寸法: 21.4 x 15.4 x 3.2 cm

## 矢田亜希子写真集。

ためらわず買っちゃう自分にやや驚きだ (笑)

女優さんに限ったことじゃなく、  
女のひとはカメラを向けられても、  
かしまったりしないなあって思ったりした。

恋人も好きな人も友達も。  
僕がカメラや携帯を向けたりしても、  
とても自然な表情を見せる。  
それは僕にはけっこう不思議。  
僕はうまく自然な表情になれないから。

恋人や好きな人や友達を撮る瞬間、その空間が素敵なんだよなあって、  
僕はひそかに思っているのだ。

March 29, 2005



単行本: 165ページ

出版社: マガジンハウス (2003/12/18)

ISBN-10: 4838714467

ISBN-13: 978-4838714469

発売日: 2003/12/18

商品の寸法: 19.3 x 13.4 x 1.8 cm

思い描いていた未来をあきらめて赴任した高校で、驚いたことに“私”は文芸部の顧問になった。...「垣内君って、どうして文芸部なの?」「文学が好きだからです」「まさか」!...清く正しくまっすぐな青春を送ってきた“私”には、思いがけないことばかり。不思議な出会いから、傷ついた心を回復していく再生の物語。

嫌いなもの。

自分は偉大なのだということを必要以上に誇示するような喋り方。  
そんな雰囲気醸し出す大人。  
そんな男にはなりたくないと思う。

そんな男が好きな女もけっこういるし、  
そういう雰囲気を欲しがるともいるので、  
それがダメだということはないけれど。

でも僕がほしい幸せの方向とは違う。

この小説の主人公は高校で講師をしている女性。  
ケーキ教室の先生と不倫をしている。  
その先生の雰囲気が、その好きではない感じだ。

僕が帰りの電車の中、そんなところを読んでも、  
不倫のおいがるおっさんと若い女のカップルが乗ってきた。  
おっさんはその好きではない喋り方をした。  
若い女は、そんな感じがいらしく、甘えた声で喋っていた。

それが小説とリンクして、とても心地悪い。  
読んでいてリズムが悪くなってしまった。

しばらくしてその二人は降りたので、  
僕は小説に戻る事ができた。

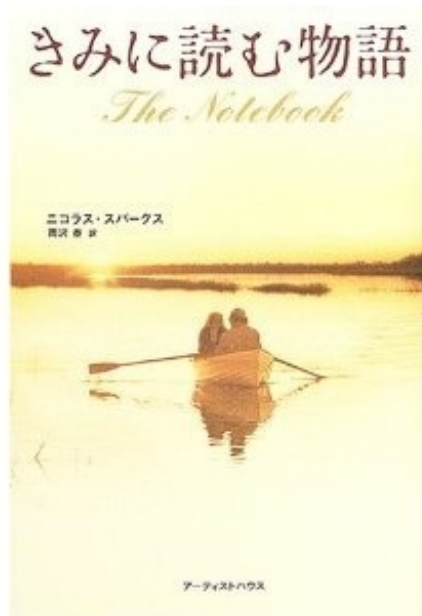
前半は歯切れ悪く読んでいたのだが、  
不倫相手と別れてからは、なんとも心地よく読めた。  
主人公は文芸部の顧問をしている。  
たったひとりの部員との毎日の会話が素敵だ。

自分が大切に思うものが何かをわかっていて、  
そのことを誇りに思えること。  
自分が自分であるというだけで、幸せだと感じられること。

それを知っている自分でいたいと、強く思ったのだ。

March 31, 2005





単行本: 253ページ

出版社: アーティストハウスパブリッシャーズ (2004/12)

**ISBN-10:** 4902088584

**ISBN-13:** 978-4902088588

発売日: 2004/12

商品の寸法: 19 x 13.6 x 2.2 cm

わたしは、ありふれた男だ。でも、わたしには全身全霊をかたむけて愛する女性がいる。いつでも、それだけで十分だった。10代の夏にアリーと恋に落ちたときから、彼女と離れて暮らしていた辛い日々も、その後の長く幸福な結婚生活の間も、いつでも彼女だけを愛しつづけてきた。その気持ちは、彼女が病気になって記憶を失ってしまった今でも変わることはない。だから、二人の愛をアリーが思いだすまで、毎日わたしは、その軌跡を綴ったノート彼女に読みきかせる...永遠に一人の女性を愛する男性の姿を、詩的な筆致で綴った究極の純愛小説。

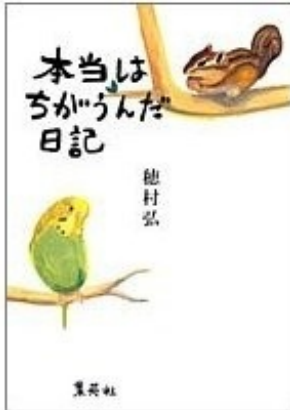
**た**とえばわかったふりをして、現実を生きていくことは正しい。

でも正しいことが幸せかはわからないのだ。

愛はあるのだろうかと思ふとき、あるよって、言ってほしい。  
ためらいなく、ほらここって教えてほしい。

僕は信じていたいのだ。  
複雑になった心でも、ちゃんと人を愛せるということ。

April 21, 2005



単行本: 208ページ

出版社: 集英社 (2005/6/24)

言語 日本語

**ISBN-10:** 4087747662

**ISBN-13:** 978-4087747669

発売日: 2005/6/24

商品の寸法: 19.5 x 14 x 2.5 cm

今はまだ人生のリハーサルだ。本番じゃない。そう思うことで、私は「今」のみじめさに耐えていた。これはほんの下書きなんだ。いつか本番が始まる。そうしたら物凄い鮮やかな色を塗ってやる。塗って塗って塗りまくる。でも、本番っていつ始まるんだ?43歳・歌人の真剣エッセイ。

**本**当は違うんだと、胸に秘めるエッセイ。

45%くらいは、僕も同じだと思っている。

ありのままの自分でいることにかっこ悪さを感じて、どこかにいる素敵な男になりたいと憧れる。

そんなふうになろうとする姿は滑稽で、滑稽であるのがわかるからこそ、ますます不自然になっていく。

その葛藤に思わず笑ってしまったが、本人にとっては大いなる闘いなのだ。滑稽さは読み進めるうちに、だんだんと薄れていった。

優しさをうまく使えないとき、「負けた」と思ってしまう著者が、気付かないうちに優しさに目を向けているのだ。それを本人は優しさだとは感じていないだろうが、「勝ち負け」ではない自然な心の動きを、感じていると思うのだ。



そこに「カッコイイ」も「カッコワルイ」もなく、  
ただ、それでいいのではないか、と思う。

45%くらいは僕も同じ。  
それも別にいいとかだめとかじゃないんだな。

ほんとうは違うんだって言いたいけど、  
自分が気付かない優しさを、誰かが気付いてくれてたら、それでいい。  
本当でも違っても。

June 27, 2005

東京タワー  
オカンとボクと、時々、オトン  
リリー・フランキー

新刊文庫

単行本: 450ページ

出版社: 扶桑社 (2005/6/28)

言語 日本語

**ISBN-10:** 4594049664

**ISBN-13:** 978-4594049669

発売日: 2005/6/28

商品の寸法: 19.8 x 13.5 x 3 cm

読みやすさ、ユーモア、強烈な感動！ 同時代の我らが天才リリー・フランキーが骨身に沁みるように綴る、母と子、父と子、友情。この普遍的な、そして、いま語りづらいことがまっすぐリアルに胸に届く、新たなる「国民的名作」。

『en-taxi』連載、著者初の長編小説がついに単行本化。

**誰**かに読んでほしい。って、まず思った。

「誰か」は、家族であり、友達であり、好きなひとであり。  
大切に思う人たちに読んでほしいと、思ったのだ。

人は関係性の中で生きている。  
その形は、「誰かと誰か」であるために作られた形だ。  
「誰かと誰か」でいるためのルールは、対象によって違うわけで、  
簡単に作られるものあれば、複雑にならざるを得ないものあって。

でも、そんなものは、たいしたことじゃないと思う。  
だって、ぼくらはまず「言葉の上」にその関係性を築いたわけじゃない。  
関係があってから、言葉が生まれた。

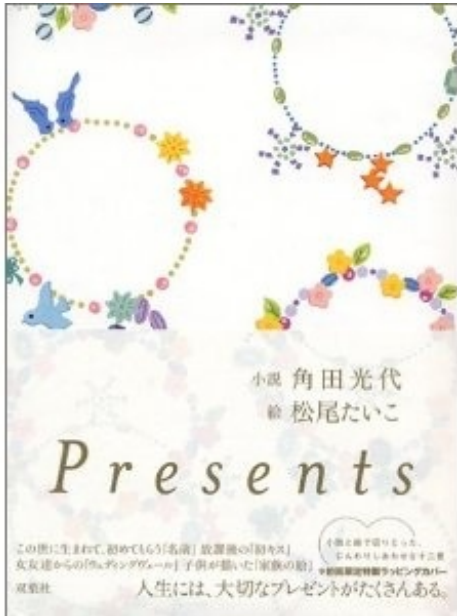
それを知っていればいいのだ。  
大切にしたいものが何かを、わかっていればいいのだ。

大切なものを失ったとき、大切だったことを改めて感じられたら、  
そんな関係を築けたことを、誇りに思うと思うのだ。

だから、大切に思う人たちに読んでほしいと、まず思った。

それを共有することで、大切な結び目がまた強くなるような、  
そんな気がするから。

November 03, 2005



単行本: 209ページ

出版社: 双葉社 (2005/12)

ISBN-10: 4575235393

ISBN-13: 978-4575235395

発売日: 2005/12

商品の寸法: 20.6 x 15.5 x 2 cm

この世に生まれて、初めてもらう「名前」放課後の「初キス」女友達からの「ウェディングヴェール」子供が描いた「家族の絵」—小説と絵で切りとった、じんわりしあわせな十二景。

「意味」というのは、はじめからあるものじゃないんだなあ、と思う。

たとえば、「愛してる」という意味を込めた花束を贈ったとしても、受け手にとってその花束が「こんにちは」だとしたら、それは「こんにちは」の意味を持った花束なのだ。

それはすこし悲しいのだけど、ほんとは少しも悲しくもないかもしれない。それはその花がやがて意味を作っていくということを、いつか知ることができると思うからだ。

時間が過ぎていくことの良さって、きっとそういうことだ。いいこともやなこと、いつかふとひょっこり現れて、「これはこうだったんだよ」なんて、そのときの秘密を教えてくれたりする。その「ふと」を導いてくれるのが、プレゼントだったりするのだ。

そんな気持ちになれたことが、この小説からのプレゼントだった。





単行本: 220ページ

出版社: 幻冬舎 (2006/01)

言語 日本語

**ISBN-10:** 4344011023

**ISBN-13:** 978-4344011021

発売日: 2006/01

商品の寸法: 19.2 x 13.8 x 2.6 cm

お笑い芸人・劇団ひとり、衝撃の小説デビュー! 「道草」「拝啓、僕のアイドル様」「ピンボケな私」ほか全5篇を収録。落ちこぼれたちの哀しいまでの純真を、愛と笑いで包み込んだ珠玉の連作小説集。

**お** 笑い芸人、劇団ひとりのネタを見たことがあるなら、なんとなく想像できる文体。

と思いながら読み進めていったら、  
しっかり「小説」として読んで自分に気づく。

伏線、伏線で、あ、これはここにつながるなって、  
予想してしまうけど、それはどこか安堵感をうむ。  
三谷幸喜の伏線には、びっくり感や感心してしまうけど、  
安堵感を感じる伏線もなかなかよいものだ。

お笑い芸人特有の笑いのセンスは、  
やはり作家の持つ笑いのセンスとは違うもので、  
コンツ的な画を想像できることが、ちょっとうれしい。

とはいえ、流れよく読んでいけば、涙だって味わえるかもしれない。  
コンツ的な画で読んでるのが心地よかった僕は泣きはしなかったが、  
純粋小説としたら、泣いてもおかしくはないんじゃないかと思う。

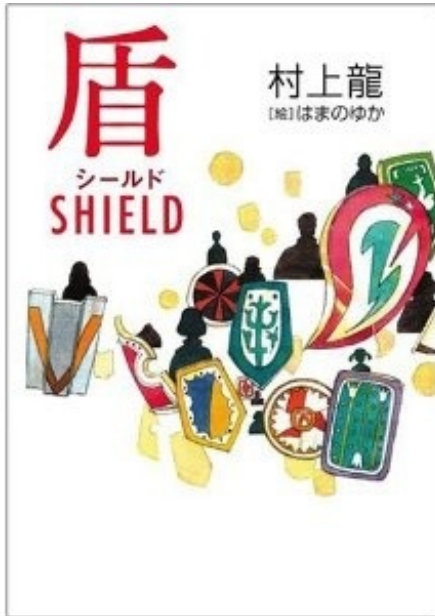
ところでストーリー。  
ホームレスになりたい会社員、アイドルを愛する男、

男に騙される女の子、ギャンブルで借金苦の男、運命の人を探す男と女...  
ちょっとだけ世の中の常識からそれた人たちの、  
悩める葛藤だったり、ふれあいだったり、つながりだったり。

気づけば、一気に読んでいた。  
あなどるなかれ。

April 06, 2006





大型本: 149ページ

出版社: 幻冬舎 (2006/3/24)

ISBN-10: 4344011449

ISBN-13: 978-4344011441

発売日: 2006/3/24

商品の寸法: 26.5 x 19 x 1.6 cm

仲よしだったコジマとキジマ、愛犬と共に野原を駆けめぐった少年の日々。やがて二人は別の道を歩むようになるが、決して忘れない言葉があった。幼いころ、森に住む老人に聞いた「盾、シールドが必要だ」という謎の言葉が意味するものは一。自分で自分を守るしかないのか、それとも...?不安と希望をあわせ持つすべての人に贈る、心温まる物語。

**正**しいとか正しくないというようなことを、もう幼稚園くらいの時からずっと考えていたと思う。

正しいとされることの中にも、ほんとは間違ってることもある。  
正しくないと言われることの中にも、ほんとはあってることがある。

かたくなにそんなことを信じてたりもした。

そしてその一部はいまでもあって、ただどかたくななわけではなくなった。  
それは、正しいとか間違ってるとかの上に、  
僕が好きなしあわせがあるわけじゃないってことがわかったからだと思う。

「村上龍／盾 -SHELD-」。

やわらかく傷つきやすい心を守るために必要な盾とは何かを考えさせる絵本。

それは結局、自分の幸せとは何かを問うということ。

僕はいまとてもしあわせでいる。

とはいえ、100パーセントではない。

誰かと愛し合いたい欲求や、もっと強い自分になりたい願望なんかが、たくさんあったりするゆえだ。

けれども、しあわせだと100パーセントの気持ちで言える。

僕はたぶん、盾を見つけたのだと思う。

それは外側にあるのではなく、いつも内側にあったもの。

僕はダメダメだったり落ちこぼれてたりもするが、僕は僕が好きだ。

時間がかかったけれど、

僕はやっと借り物じゃない自分と出会えた気がする。

あなたをしあわせにするものは、どこにありますか？

May 30, 2006



単行本: 234ページ

出版社: 講談社; 第5版 (2004/11/20)

言語 日本語

**ISBN-10:** 4062126737

**ISBN-13:** 978-4062126731

発売日: 2004/11/20

商品の寸法: 19 x 13.2 x 2.4 cm

「父さんは今日で父さんをやめようと思う」。かなり壊れているけれど、めっちゃめっちゃやさしく繋がる家族の姿を中心に描く。注目の新進作家の最新作。

**瀬**尾まいこさんの小説を読むとき、いつも、「あ、この人、かっこいい」と思うような登場人物がいる。

「図書館の神様」の垣内くん。  
「天国はまだ遠く」の田村さん。  
「優しい音楽」のタケル...

共通項は、自分の芯を持つてるとのこと。

ちゃんと自分を生きているということが、とてもかっこいいのだ。  
でも、この「幸福な食卓」の中には、そんなふうにかっこいい登場人物はいない。  
それでもなぜか引き込まれてしまうのは、  
それぞれがそれぞれに「危ういながらも、心を保とうとしている」からだと思う。

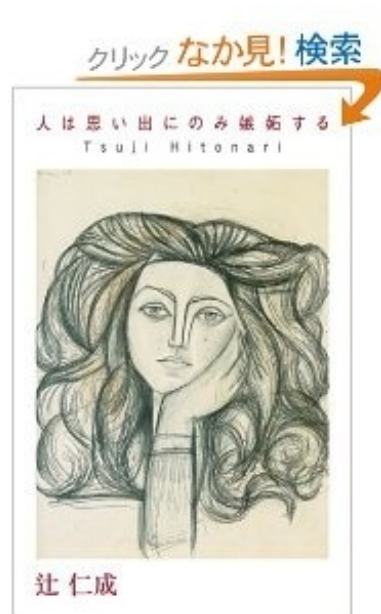
父さんをやめようと思った父さん、  
深く生きることやめようと思った直ちゃん、  
家を出ていった母さん、  
梅雨になると憂鬱になる佐和子、  
友達を作らない主義の坂戸くん、  
単純で不器用な大浦君、  
恋人がたくさんいるヨシコ...  
みんな危うく生きている。

でも、少しずつ変わろうとしたり、誰かと触れ合おうとしたりして、  
心が前を向くようにがんばっている。 がんばれなかつたりもしながら。

つまりはそれが、生きることなんだろうと思う。  
かっこよく生きれるかどうかは、結果で、大切なもののために生きようって思うことができたら、  
ダサくたって、変だって、いいかもしれない。

それがいまの僕の道しるべだ。

February 09, 2008



単行本: 169ページ

出版社: 光文社 (2007/07)

**ISBN-10:** 4334925588

**ISBN-13:** 978-4334925581

発売日: 2007/07

商品の寸法: 19 x 12.6 x 1.6 cm

あなたが死んだら、生き返らせる。忘れられない思いを胸に今日を生きるすべての人たちへ。

**夕** イトルが示す通り、登場人物のそれぞれがそれぞれに嫉妬する。

彼（戸田さん）の心にいる亡くなった元カノに、彼女（葉）は嫉妬し、葉を想う安東君は戸田さんに嫉妬し、戸田さんは安藤君に嫉妬する。亡くなった元カノも、葉に嫉妬していた。

思い出に嫉妬するしかない心の状態は、いいものではない。そこには誰も立ち入ることができないからだ。けれど誰かを愛するとき、その深みにはまることもある。だから折り合うことが大事なのだ。

相手の思い出を取り上げることなんてできない。だから嫉妬は人を苦しめるんだろう。

その苦しみをなでられてるみたいに言葉を読む。物語が進むにつれ、なでられてたのが、えぐられるようになった。そんなふうになぞなぞすること自体にびっくりした。なんというか、思春期のころのようなゾクゾク感だ。

もうないと思っていたゾクゾク感。  
それが襲ってきて、不思議な気分で高揚したのだ。

「愛しすぎることと愛さないことは同じ」  
その意味が大人になった僕にはわかってしまったのに、  
思春期のようにゾクゾクしている。

この矛盾が同時に心に飛び込んでくるこの小説は、  
ただただ、すごい！の一言だった。

ああ、やられた。

March 21, 2008

オイカワショートロー  
伊津野果穂 画

# ハリ系



ポプラ社

単行本: 160ページ

出版社: ポプラ社 (2008/03)

**ISBN-10:** 4591100626

**ISBN-13:** 978-4591100622

発売日: 2008/03

商品の寸法: 19.2 x 12.8 x 2 cm

サル以外の動物から進化した人間がいる世界。ハリネズミ人間のハリ彦が恋をしたのは、サル系のすず子だった。ちょっと変わった男子高校生の、ファンタジック青春物語。

**人**間にはサルから進化したサル系と、ハリネズミから進化したハリ系がいる。

という設定の下、  
ハリ系の男の子（ハリ彦）がサル系の女の子（すず子）に恋をする話。

ハリ系は背中にハリが生えていたり、耳が大きかったりする。  
緊張を感じるとハリがざわめいたりもする。  
それ以外はサル系の人間と変わらないが、  
そのことにハリ彦は少しのコンプレックスを持っている。

ハリ系とサル系というわかりやすい違いはなくても、  
人は誰もコンプレックスを持っていると思う。

人と違うちょっとのことで自信を持てなかったり、  
そのせいにしてあきらめたり。

それはもったいない。

だってぼくたちはみんな違う。



生まれたときから、みんな違う。  
違うのは当たり前。

だけど似ているどこかがあったり、  
違うところを面白いと感じたり。

世界唯一のワニから進化した鱷淵さんなんて、  
ほとんどワニなのに、サル系からモテまくりだ。  
(あまりにプレイボーイで最低なのだが)

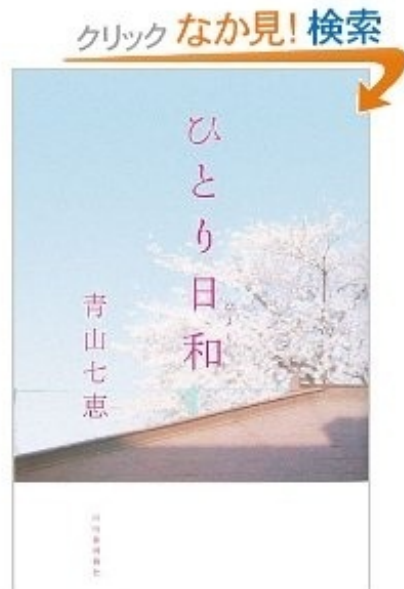
自転車で二人乗りすると、背中のハリがささってしまうから、乗らない優しさ。  
でも、すず子が前に乗るのは”普通”じゃないからと拒否する、青春ぼさ。

ハリ彦は”普通”ということにこだわってしまうが、  
ハリ彦そのものの行動は、”普通”なのだと、すず子に気づかされる。

そう、簡単に言ってしまうえば、  
普通の高校生の恋の物語だったのだ。

あ、青春を思い出して、見えない背中のハリがざわついた。

March 22, 2008



単行本: 169ページ

出版社: 河出書房新社 (2007/2/16)

言語 日本語

**ISBN-10:** 4309018084

**ISBN-13:** 978-4309018089

発売日 : 2007/2/16

商品の寸法: 19.4 x 13.6 x 2 cm

人っていやね.....人は去っていくからね。

20歳の知寿が居候することになったのは、母の知り合いである71歳・吟子さんの家。

駅のホームが見える小さな平屋で暮らし始めた私は、キオスクで働き、

恋をし、吟子さんとホースケさんの恋にあてられ、少しずつ成長していく。

選考委員が絶賛した第136回芥川賞受賞作。

**ぼ**くはいま、恋愛とはなにかと、わりとまじめに考えている。

そしてそんなふうまじめに考えるときというのは、  
恋愛してないときだということに気がついた。

誰かを好きになり、一生懸命になっているときは、  
答えがあってもなくても、無我夢中だ。

20歳の知寿は、母の知り合いである71歳の吟子さんの家で居候することになる。

とくに大きな出来事が起こることもなく、

知寿は別れと恋と別れを繰り返し、吟子さんはダンス仲間のホースケさんと恋をする。

知寿と吟子さんは日常的にたくさん話をするわけじゃないが、  
恋の話はよくする。

どんなに年が離れていても、女同士にはそういう話題があっただけいいなと思う。

ぼくは、年を取った人と男同士でそういう話をしてみたい。  
女同士は、そんなにフィーリングが合うわけじゃなくても、  
恋愛の話ができるような気がする。

でも男同士ではフィーリングが合わないと、そういう話ができない。  
ジェネレーションギャップがあればあるほど。  
だから、女同士がうらやましい。

おそらく、恋愛とはなにかとまじめに考え、  
出した美しい答えがあったとしても、  
そんなふうに美しく恋愛をすることは難しい。

でも、こうやって人を愛するのだという気持ちは持っていたい。  
そして、そうやって死んでいきたい。

人にとって大切なのは、  
自分を好きになることと、誰かを好きになることだから。

March 23, 2008



小学館

単行本（ソフトカバー）：256ページ

出版社: 小学館 (2007/11/12)

**ISBN-10:** 4093877521

**ISBN-13:** 978-4093877527

発売日：2007/11/12

商品の寸法: 18.4 x 13.2 x 1.8 cm

イタリア・シチリアでのバカンス中に、草野球をしようと思い立った八木虎造(職業・カメラマン、草野球歴・約20年)。言葉もわからないまま近所にチームを発見、テストを受けて、サインして…。気がつけば、イタリアプロ野球・セリエAのメンバーになっちゃいました。20点以上のシーソーゲームは当たり前。試合のたびに乱闘勃発。はちゃめちゃイタリア野球の真髄を見よ。

**セ**リエAを見たことがありますか？

ミラン？インテル？ユーヴェ？  
サッカーの話ではなくて。

野球のセリエA。

イタリアにプロ野球があったことに驚いた。  
そして、うっかり「セリエA」の選手になってしまうとは。

仕事に追われ、倒れてしまったことをきっかけに、  
どこか遠いところでしばらく休むことを選んだカメラマンの八木虎造さん。

選んだ先はイタリアのシチリア島。

南イタリアの開放的な生活でリフレッシュできると思っていたが、

すぐにホームシックに陥ってしまう。  
街に出ても差別されているように感じてしまい、  
家にひきこもるようになってしまう。

1ヶ月ほど過ぎたあと、アテネオリンピックがまもなく始まるという時期になり、  
八木さんはアテネに行こうと思いついた。

そこで八木さんは野球を見つけた。  
そして涙を流しながら決意をする。

「絶対に野球をやってやる！」

人には「もうだめだ」と思ったときに、「これ！」というものと出逢うときがある。

八木さんの場合はそれがアテネで見た「野球」だった。  
そして、とにかく野球をやりたい一心でチームを探し、  
片言のイタリア語で「野球がしたい」と言い続けると、  
それはやがて叶ったのだ。

それが「セリエA」であり、安いながらも給料がもらえるプロだということも知らずに。

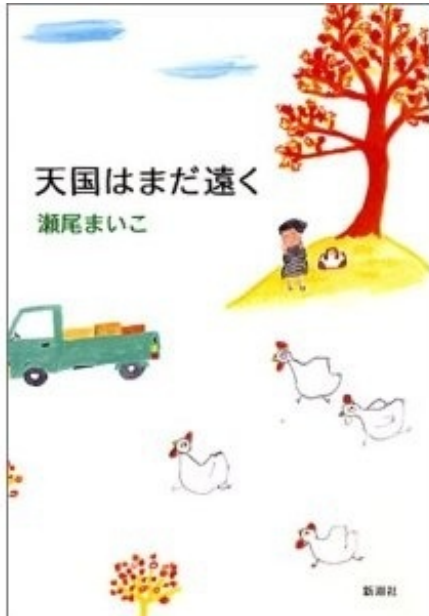
八木さんがそこで得たいちばんたいせつなものは、  
野球を通じてできた「自分の居場所」なんだろう。

人は気持ち次第でどんなふうにも変わっていきける。  
その気持ちは、自分の想いと、人との出会いが、  
きっといい方向に導いてくれるのだ。

八木さんは2007年の春からは、リトアニアのチームに所属している。

世界中のどこかに、自分の居場所は必ずあるのだ。

March 24, 2008



単行本: 169ページ

出版社: 新潮社 (2004/6/23)

**ISBN-10:** 4104686018

**ISBN-13:** 978-4104686018

発売日: 2004/6/23

商品の寸法: 19.2 x 13.8 x 2.2 cm

誰も私を知らない遠い場所へ—そして、そこで終わりにする。...はずだったけど、たどり着いた山奥の民宿で、自分の中の何かが変わった。あなたの心にじんわりしみる気鋭の作家の最新長篇。

「あ たしにとってあなたは、田村さんだったんだなあと思った」

と、唐突に別れた彼女が言ってきた。  
そのときぼくはまだ、この小説を読んでなかったので、  
なんのことかわからず困った。

でも、わからないのはいつものことだったので、

「そうか」

と言っておいた。

そして、小説を読んだとき、ぼくは泣いた。

23才のOL千鶴は、日々の生活に疲れ果て、  
死のうと思ひ山奥へと辿り着く。  
山奥にぽつんとあった民宿で、恋人に遺書代わりにメールを送り、  
睡眠薬を飲む。

だが、自殺は失敗に終わる。

死ぬことのできなかった千鶴は、自殺をあきらめ、仕方なくその民宿にしばらくいることになる。

民宿の主である田村さんの大雑把な優しさにふれることで、千鶴は生きる力を取り戻していくが、自分があるべき場所はここではないことに気がつくのだった...

別れた彼女は自殺したいわけじゃなかった。でも、心はそれと同じくらい動いていなかった。

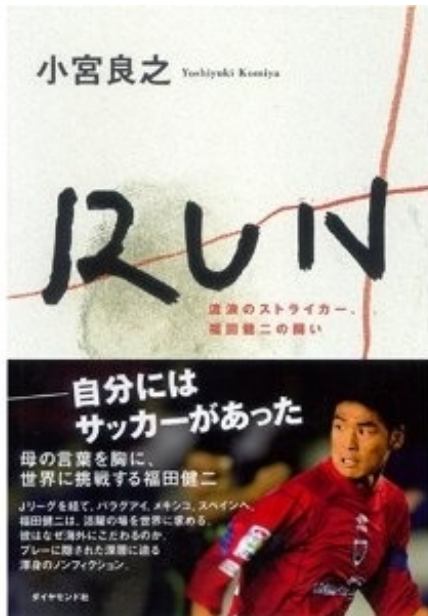
ぼくは田村さんではないが、そんな彼女の心を動かすことができていたのだ。そして、自分があるべき場所がここではないと、彼女も気がついたのだ。

僕が田村さんだったなんて、ありがとう。誰かの光になれるなんて、そうあることじゃないよな。

彼女の気持ちを理解するのは難しかったけれど、この小説が、彼女の気持ちを語っているようだった。

March 26, 2008





単行本: 215ページ

出版社: ダイヤモンド社 (2007/11/16)

ISBN-10: 4478002487

ISBN-13: 978-4478002483

発売日: 2007/11/16

商品の寸法: 19.2 x 13.2 x 2.4 cm

スペインで活躍する福田健二。

家族の絆を描くスポーツ・ノンフィクションの新機軸。

「好きなサッカーで  
世界に胸を張れる  
選手になって下さい」

自殺した母親は、小学5年生だった健二にわずか三行の遺書を遺した。彼は、この言葉の意味を問うように、サッカー中心の人生を歩みます。高校卒業後、鳴り物入りでJリーグへ。その後、パラグアイ、メキシコを経て、現在はスペインで中心選手として活躍。本書はそんな福田選手を2年以上追ったノンフィクション。

エゴイストで一匹狼だった福田健二は、海外でチームを渡り歩くなか、チームメイトやサポーターの声に耳を傾けるようになる。また妻や娘に支えられていることに気がついていく。そして亡き母に導かれるかのように、ゴールを決める。家族とは何か、絆とは何か。本書は、親を知らなかったひとりの少年が、サッカーを通して家族の存在を知り、「男」をして成長していく姿が描かれている。スポーツを題材にしながら、これまでになかった家族の絆を描くスポーツ・ノンフィクションの新機軸。

著者は気鋭のスポーツライター、小宮良之氏。本書の元になった記事は、2005年9月『Number』で「遺書。」という名前で発表され、第2回zassi.net記事大賞の人物・インタビュー部門賞を受賞した。

「家族というのも、よくわからないんです」

ぼくにとって家族は当たり前、「そこにあるもの」。  
だけど、それでもうまく言えないもどかしさも抱えている。  
一般的な家庭環境であっても、悩みはあるのだ。

それでも家族という感覚は、わかっている。

サッカーのスペイン2部リーグでプレーする福田健二。  
彼の生い立ちは壮絶に見える。

両親は早くに離婚し、兄と母と三人で暮らしていた。  
健二が小学五年生のとき、母は自殺をする。

母は遺書を残していた。

兄にはこれからのことを原稿用紙3枚に丁寧に書かれていたが、  
健二にはたった3行の言葉しかなかった。

「好きなサッカーで  
世界に胸を張れる  
選手になってください」

健二はその言葉に自問自答しながら、  
生きるためにサッカーを続けていく。

やがて彼も結婚をし、  
自分が父親になった。

父親というものがわからない健二は、  
どういうふうにふるまえばいいかわからなかった。

そんな彼に、妻は父親であること、家族であることを、  
ゆっくりと教えてあげるのがあった。

「家族だけはどんなときも健二の味方なの」

妻の言葉に、健二は初めて家族というものの愛しさを知った...

この本を読んだ後、  
テレビで彼の特集を見た。

ケガをしてなかなか出場機会に恵まれない中、  
やっと巡ってきたチャンスで、自らPKを得る。

ぼくはこのPKが決まるように願った。

だが...  
放ったシュートはキーパーに止められてしまった。

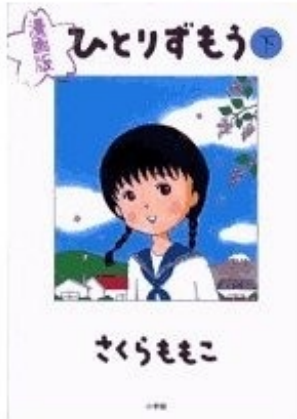
神様はなんてことをするんだ...

ドラマならPKが決まって、復活を果たすきれいなエンディングが作れるのに。

これがドラマじゃなく、人生を生きるってことだ。

母のたった3行の言葉と、家族の笑顔やぬくもりを胸に。





単行本: 217ページ

出版社: 小学館 (2008/03)

**ISBN-10:** 4091790259

**ISBN-13:** 978-4091790255

発売日: 2008/03

商品の寸法: 18.4 x 13.6 x 2.4 cm

さくらももこ氏6年ぶりの書き下ろしエッセイ『ひとりずもう』の漫画版、待望の下巻登場！ デビュー秘話や親友・たまちゃんとの別れを描いた、感涙必至のほのぼの成長記、完結編！

「き  
らきらしたい」

19のときに好きだった友達は、口ぐせのように、  
そう言っていた。

彼女は気持ちの浮き沈みが激しく、  
気持ちが落ちているときは、

「きらきらがないよ」

と言い、

気持ちが高揚してるときは、

「きらきらがきたよ」

と言った。

それにつられて、ぼくは彼女と話するとき、

「最近、きらきらはどう？」

なんて、そんなことをよく言ったものだ。

さくらかもこは、お風呂の中で、きらきらを見つけた。

それは自分の人生にかかわる一本の道を、  
はっきりと見つけたからだった。

めんどくさがりで、のんびりやで、恋もよくわからない。  
いつも漠然とした不安を抱えている。

それでも漫画家になりたいという  
秘めた想いが消えることはなく、彼女はそこに導かれていく。

のほほんと生きているみたいに見えても、  
心の中ではいろんなことが起きている。

彼女が、どんなにまわりの流れに乗れなくても、  
たまちゃんという存在に救われてるんだなあと思うと、  
泣けてしまった。

人生にはきらきらを見つける瞬間があるんだろう。

たとえば本気でプロ野球選手になると思った子どもころ、  
ぼくはきらきらしていた。

それと同じようなきらきらを持っていたい。

何かになることじゃなく、  
ひとつひとつに心が動かされるような、

そんなきらきらした心を持っていられたらと、思うのだった。

April 04, 2008



単行本: 328ページ

出版社: 理論社; B6版 (2008/3/20)

言語 日本語

**ISBN-10:** 4652079249

**ISBN-13:** 978-4652079249

発売日: 2008/3/20

商品の寸法: 18.4 x 13.6 x 2.8 cm

大阪の下町にある中華料理店・戸村飯店。この店の息子たちは、性格も外見も正反対で仲が悪い。高3の長男・ヘイスケは、昔から要領が良く、頭もいいイケメン。しかし地元の空気が苦手で、高校卒業後は東京の専門学校に通う準備をしていた。一方、高2の次男・コウスケは勉強が苦手。単純でやや短気だが、誰からも愛される明朗快活な野球部員。近所に住む同級生・岡野に思いを寄せながら、卒業後は店を継ぐつもりでいた。春になり、東京に出てきたヘイスケは、カフェでバイトをしながら新生活をはじめ。一方コウスケは、最後の高校生活を謳歌するため、部活引退後も合唱祭の指揮者に立候補したり、岡野のことを考えたり、忙しい日々を送っていた。ところが冬のある日、コウスケの人生を左右する大問題が現れて……。

**も** はや、虜だ。

瀬尾まいこさんの新刊は、コテコテの大阪で生まれ育った兄弟の物語。

コテコテな感じに馴染めず、生まれ育った場所が息苦しい兄、ヘイスケ。そんなヘイスケを毛嫌にする、いかにもコテコテな弟、コウスケ。

間逆な性格だということをお互い自覚しているが、自分のことはわかってるようで、わからない。

けれど、ふたりと触れ合う人たちは、それぞれのことをよくわかっている。

それを思い知ると同時に、ふたりはお互いの気持ちの深いところを、なんとなく知るようになるのだ。

帯文には「爆笑コメディ」と書いてあるけれど、正直ぼくには、くすっと笑える程度だった。

大阪弁の掛け合いにはリズムがあって、小ボケもよく入っているから面白いのだけれど、それよりもぼくが瀬尾さんの物語に陶酔してしまうのは、やっぱり人の心が丁寧に見えてしまうなのからなのだ。

たとえば、ヘイスケが今いる場所に馴染めないでいることの淋しさは、すごくよくわかる。要領がいいし、見た目もいいヘイスケに、あまり好感は持てない。コウスケ目線のヘイスケは、誤解も含めてスカしてる感じだし、ヘイスケの言動にもイラついたりもする。モテることへの嫉妬もあるのだけど。

でも、家族のなか、町のなかでの自分が、自分ではいられないことの淋しさ、せつなさ、やりきれなさをヘイスケ目線で知ってしまうと、とたんに「ああ、わかる」となるのだ。

それは、ぼくも同じだったから。

ヘイスケが東京に出て、自分が自分でいられるようになったように、ぼくは北海道に行って、それを思った。

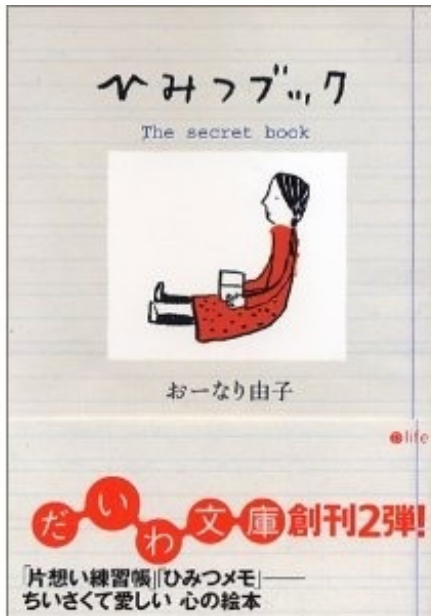
たいせつだと思う人に、たいせつにされていることを感じられる感受性を持つこと。

それがあれば、自分でいられるんだ。

ヘイスケがコウスケに、コウスケがヘイスケに、大切にされていることを知ったとき、ふたりは少し大人になった。

それを教えてくれるのは、近くにいることのできる「誰か」なんだなあ。

April 07, 2008



文庫: 149ページ

出版社: 大和書房 (2006/03)

ISBN-10: 4479300147

ISBN-13: 978-4479300144

発売日: 2006/03

商品の寸法: 15 x 10.6 x 1.8 cm

胸がいたいので、大事な気持ちは誰にもいいません。ひとりの時間をうれしくさせる小さいひみつを持っていますか？ひみつは、自分も知らない自分を見つけること。わくわくすること。絵と文で自在に描く、素敵な大人になるための“心の絵本”。

ひみつにしてないけど、誰にも言ってないことがある。

小学生のぼくは野球ばかりやっていた。  
だからほとんど野球のことばかり考えていた。  
ほとんど野球バカ。

そんなぼくが野球以外に好きだったこと。

それは雲を見ること。

雲の流れを見てるだけでわくわくしてた。

でも、そんなことを口にするにはなくて、  
ただ野球ばかりやっていた。

大人になって飛行機に乗ったとき、  
雲の中にいることにわくわくした。



何時間見ても飽きない自分を不思議に思ったとき、  
小学生のころの自分がよみがえった。

ぼくは雲を見るのが好きだったんだ。

でもそれは、誰にも言っていなかった。

それは自分だけの、自分に向けた秘密にしたかったのかな。

ふとしたとき、雲の流れを見てる。

そして、ぼんやり想ってる。

ちいさなぼくがそこにいる、と。

April 08, 2008



文庫

出版社: 幻冬舎 (1999/04)

言語 日本語

ISBN-10: 4877287159

ISBN-13: 978-4877287153

発売日: 1999/04

商品の寸法: 15.2 x 10.6 x 1.2 cm

「電話したい電話したい電話したい電話したい、気が付いたら彼女の家の番号をダイヤルしていた」(本文より)盛り上がった初デート。家に戻った俺は、もう一度彼女と話をしたくなる。煩悶した末にかけた一本の電話が、不幸な夜の幕開きだった…。俺が学んだ“恋愛に関する七つの真理”とは?可笑しくも、しみじみと染み入る、人気脚本家の名短篇。

**モ** テない男は、モテないのだ。

と、モテない男のぼくは言い切ってやろう。

モテない男はたまにきたチャンスの掴み方が下手だ。  
それがうまかったら、モテるのだ。

そんなことを喜劇にしてみせる、三谷幸喜の作品。

デートらしきものをして家に帰ると、彼女に電話をしたくなった、「俺」。

迷ったあげく、かけてみると、留守電に。

留守電のシミュレーションをしてないため、あせる俺。

かけるのをやめようと思うが、どうしても「今日は楽しかった」と伝えたい。

迷ったあげくかけてみると、話し中。

受話器が上がったままになってるのではないかと、104で確認すると、受話器は上がってないとのこと。

もしや他の男と電話してるのでは、と、嫉妬する。

俺は彼女に「楽しかったね」と言えるのか...

モテない男の妄想悲劇が次々にやってくる。

そして「俺」は思うのだ。

恋愛に関して、新たに悟ったことは、既にもう前に悟っている、と。

そうだよな。

と、モテない男のぼくは思う。

あ、この間違え方、前もあった。  
なんて思うことばかりだ。

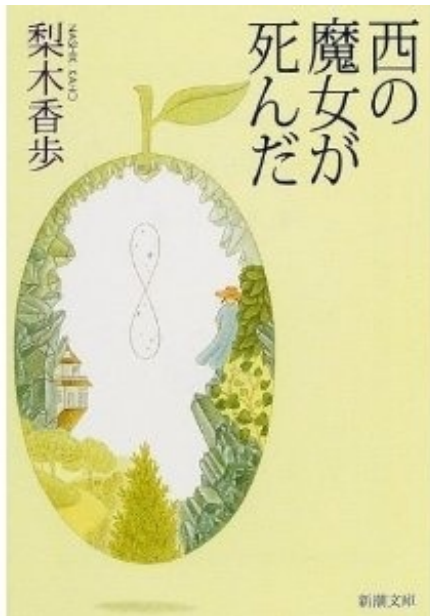
本能が成長するのって、難しい。

成長させるべき場所は、理性のほうか。

いつだって脳内のイメージに実際の恋愛は追い付かない。  
だからこそ、たまにする恋愛の喜びも悲しみも全部愛しいのだ。

そしていまとなっては、  
一生懸命に誰かを好きになるときの自分は少し、バカ。  
それを愛しく思ったりしてる。

April 13, 2008



文庫: 226ページ

出版社: 新潮社 (2001/8/1)

言語 日本語

ISBN-10: 4101253323

ISBN-13: 978-4101253329

発売日: 2001/8/1

商品の寸法: 15 x 10.6 x 1 cm

「西の魔女」とは、中学生の少女・まいの祖母のこと。学校へ行けないまいは、田舎の祖母のところで生活することに。まいは、祖母の家系が魔女の血筋だと聞く。祖母のいう魔女とは、代々草木についての知識を受け継ぎ、物事の先を見通す不思議な能力を持つ人だと知る。まいは自分も魔女になりたいと願い、「魔女修行」を始める。この「魔女修行」とは、意志の力を強くし、何事も自分で決めること。そのための第一歩は規則正しい生活をするといった地味なものだった。野苺を摘んでジャムをつくったり、ハーブで草木の虫を除いたり、身近な自然を感じながらの心地よい生活が始まる。次第にまいの心は癒されていく。魔女はいう。「自分が楽に生きられる場所を求めたからといって、後ろめたく思う必要はありませんよ。サボテンは水の中に生える必要はないし、蓮の花は空中では咲かない。シロクマがハワイより北極で生きるほうを選んだからといって、だれがシロクマを責めますか」そしてまいは、この「西の魔女」から決定的なメッセージをうけとるのだった……。

太陽が好きな、きみへ。

太陽が好きなきみは、日常と折り合いをつけて暮らすのが得意じゃなくて、心が不安定な毎日をすごしている。

ぼくはきみに、居心地のいい場所にいればいいと言ったけれど、きみが今いる場所でもがくことで、心が成長できたら、と、思ってるよ。

中学生の「まい」は、日常と折り合いがつけられず、

心をすり減らしてしまっている。

自分が扱いにくい子だということ、親とはわかりあえないということ、クラスメイトとの付き合いにわずらわしさを感じていること。

まいは自分に自信が持てないでいた。

学校に行けなくなったまいはしばらくおばあちゃんの家で暮らすことになる。

おばあちゃんはまいの話に耳をかたむけ、それを優しく強く受け止め、そしてまいに「魔女」になるための修行を課す。

魔女の修行とは、「なんでも自分で決めること」。

おばあちゃんは暮らしの中で手本となり、まいにそれがどれだけたいせつなことかを伝えていくのだ。

まいは自分の悲しみをおばあちゃんに伝えるうちに、「自分で決めること」のたいせつさを知っていくことになる。

それが自分のたましいの成長を促しているのだと。

たぶんだけど、女子の世界は、男子よりもわずらわしいことが多い思う。  
(それでもなかったら、ごめんなさい)  
でも、だからこそ、そのわずらわしさを「自分で決める」ことで乗り越えられたら、男よりも強くて、きれいな心を持ち続けられるんじゃないかなと、ぼくは思ったのだ。

太陽が好きな、きみへ。

だから、きみも「自分で決める」ことから逃げずにいたらいい。  
きっときみはきれいなたましいを失わずにいられるよ。

April 14, 2008



単行本: 235ページ

出版社: ジービー (2007/01)

ISBN-10: 4901841548

ISBN-13: 978-4901841542

発売日: 2007/01

商品の寸法: 18.6 x 13 x 2 cm

シ ャララ～ラ シャラララ～ラ シャララ～シャラララ～

知ってる曲の歌詞を読むときは、メロディが聞こえてしまって、  
歌詞だけを読むのは意外とつらいもの。

なのにヒロトの歌詞は、メロディをわかっているのに、「詩」として響く。

ブルーハーツ、ハイロウズ、クロマニオンズのボーカリスト、甲本ヒロトの全詞集。

言葉はシンプルなのに、わからない。  
わからないのに、わかる。

「わからないのに、わかる。」

これってどういうこと？

ぼくが思うに、言葉にできない瞬間がたくさんあって、  
ひとにうまく説明できないってこと、あるでしょう？

たとえば、心がぎゅっとなってて、  
"ぎゅっ"以外の言葉はしっくりこないとき。

ぼくはいま、ぎゅっとなってるんだよ。

なんだかわからないけど、すごくすごく、ぎゅっとなってるんだよ。

たぶんそういう気持ちの深いところに、  
絶妙な言葉を持ってきて、さらっと本当のことを言う。

だから、また、ぎゅっとなってしまう。

ぎゅっとなるのは、たいせつだから。

たいせつなことを忘れそうになるたび、  
ぼくはヒロトの言葉に会いに行く。

April 17, 2008



小学館

単行本: 274ページ

出版社: 小学館 (2007/3/30)

**ISBN-10:** 4093861846

**ISBN-13:** 978-4093861847

発売日: 2007/3/30

商品の寸法: 19 x 13.8 x 2.8 cm

ハナミズキが美しい西の果ての港町。この町で生まれた池水琴美はバー「ドッグウッド」の新しいバーテンダー、ヒサノリと恋に落ちる。デートで出かけたテーマパーク、いっしょに願い事をした雲のこと、そしてふたりを取り巻く人間関係、そっくり同じことが毎週テレビで放送されるドラマの中でも起きている。「なぜなの」琴美の小さな疑問は、つきあいはじめた新しい恋人ヒサノリに向けられていくが。

## 恋

愛はすれ違ってなんぼだね。

というか、すれ違うことなく恋愛することなんて無理か。  
燃え上がって、すれ違って、悩んで、分かり合って、  
それを繰り返していくことが恋愛だもんない。

新鋭のシナリオライター、仲村尚紀はプレッシャーに押しつぶされ、  
仕事を放り投げて、西へ西へと逃げ出してしまう。

たどり着いた田舎町でも、人との間に距離を保ち、  
自分を偽ってバーテンダーとして暮らしていくが、  
ラーメン屋の娘、池水琴美と出会い、恋をする。

琴美と付き合ううちに、町や町の人たちともつながりを持つようになり、  
それが自分にとってたいせつなものだということに気づく。

町の人々にそれぞれのドラマを感じた尚紀は、



琴美との恋をメインに、シナリオを書き始める。

そしてそのシナリオがテレビドラマとなるが、  
琴美に対しては、自分たちの物語であることを伝えるタイミングをなくしてしまう。

琴美は尚紀を信じられなくなり、徐々にすれ違いはじめる...

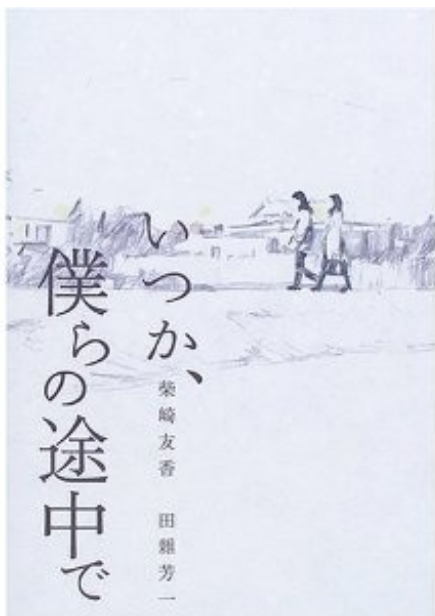
そう簡単に恋がはじまるかよって、この手の話でいつも思う、ぼく。

それでも、ハッピーエンドを望んでしまうんだよね。  
ページをめくるたび、早く誤解を解いてくれって思ったり。

それは物語に引き込まれてる証拠だ。

そう簡単に恋は始まったりしないけど、  
こんなふうにドラマになりうる日常を、たぶんぼくらは生きている。

April 18, 2008



単行本: 100ページ

出版社: ポプラ社 (2006/02)

**ISBN-10:** 459109149X

**ISBN-13:** 978-4591091494

発売日: 2006/02

商品の寸法: 21.2 x 15.4 x 1.8 cm

書いた手紙がまだ届いていない、空白の、でも幸せな時間に、手紙が届くはずの相手が普通に暮らしている一京都と山梨、遠く離れて暮らすふたりの「往復書簡」ストーリー。

**手**紙はタイムマシンに乗ってくる。

遠距離恋愛をしていたころ、  
「メールのある時代に生まれてよかった」  
と、彼女が言った。

ぼくもそう思った。

想いが一瞬で届くメールを受け取る。

それにぼくは想いを返す。

そのやりとりの間隔さえ、とても優しい時間になる。

でも、優しい時間が崩れてしまうと、  
それは苦しい時間になってしまう。

苦しくなるほど、求めてしまった。

ぼくは子どもだったのだ。

この本のストーリーのように、  
手紙を書くようなペースで、手紙が届くような想いの速さで、  
そんな付き合いができていけばなあ。

想いはポストから、時間をかけて、遠く離れている人のポストへ。

手紙を待つ間、ぼくらは普通の時間を過ごす。

でもその「普通」を綴った手紙にこめた想いは、  
たった一人への、「特別」な時間なのだ。

桜が咲いたころ。

「桜前線はゆっくり北上するのに、メールは一瞬で届くね」

普通の毎日を特別に変える魔法は、  
こんなふうに、すぐそばにあった。

手紙でも、メールでも。

あったのに、ぼくは子どもだったなあ。

April 21, 2008



単行本: 224ページ

出版社: 文藝春秋 (2006/05)

ISBN-10: 4163249001

ISBN-13: 978-4163249001

発売日: 2006/05

商品の寸法: 19 x 13.6 x 2.4 cm

元OLが営業の仕事で鍛えた話術を活かし、ルイズ吉田という名前の占い師に転身。ショッピングセンターの片隅で、悩みを抱える人の背中を押す。父と母のどちらを選ぶべき?という小学生男子や、占いが何度外れても訪れる女子高生、物事のおしまいが見えるという青年…。じんわり優しく温かい著者の世界が詰まった一冊。

**終** わることは、はじまることなのかな。

「OL・吉田幸子」から、占い師に転身した「ルイズ吉田」。彼女のスタンスはありきたりな一般論を、占い師っぽい言葉で、客の背中を後押しする程度のもの。

占い師としてのツボを心得た彼女だが、ときどき彼女を惑わせるお客さんがやってくる。

「おとうさんとおかあさん、どっちにすればいい?」と聞く男の子。  
「気になってほしいと思うひとがいる」という女子高生。  
「おしまいが見えてしまう」という大学生。  
そして、転職すべきかどうか悩む、彼女の彼氏。

ありきたりな相談と思いきや、彼らには人には言えない事情を抱えていた...

占いに頼るのは、圧倒的に女性のほうが多いと思うが、男でも、ちょっとした占いは気になったりするもの。

朝のテレビの占いに、実は一喜一憂してたりもする。

誰だって、悪いことよりも、いいこと言われたいよね。

でも、人生って、いいことも悪いこともごちゃまぜでできてる。  
だから、いいことも悪いことも、必ず終わって、またはじまる。

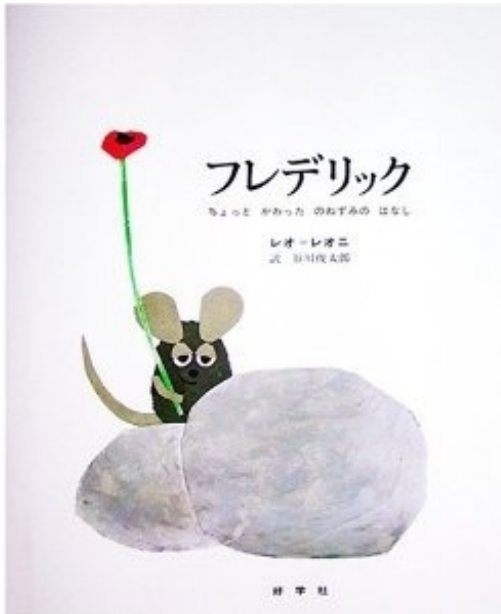
そう、終わって、はじまる。

もし、あなたに終わりが見えてしまって、苦しくても、  
それでもいいじゃん。

また、はじまるんだからさ。

そんな気になったのでした。

April 22, 2008



大型本: 32ページ

出版社: 好学社 (1969/4/1)

言語 日本語

**ISBN-10:** 4769020023

**ISBN-13:** 978-4769020028

発売日 : 1969/4/1

商品の寸法: 27.6 x 22.6 x 0.8 cm

仲間の野ねずみたちが、冬に備えて木の実などを貯えているのに、フレデリックだけはなぜか何もせずに、ぼんやりとしています。でも長い冬、野ねずみたちを救ったのはフレデリックでした。谷川俊太郎の詩的な言葉と、切り絵で表現されたねずみたちが想像を広げてくれます。

**あ** あなたの役割は、あなたにしかできません。

せっせと働く他のねずみたちをよそに、  
光や言葉を集めてる、フレデリック。

フレデリックの目はいつも眠そうだ。

ほんとうはフレデリックも働きたいと思ってるんじゃないかな。

でも、他のねずみと同じように働く、ということが苦手だから、  
悲しいけれど、自分ができることをしている。

それが役に立つことかどうか確信はないままで。

そんなフレデリックの目がイキイキとしたのは、

集めた光や言葉を、みんなに披露し、拍手を浴びたときだ。

このとき、初めてフレデリックは、自分の役割を確信したんじゃないかなと思う。

自分の役割を自覚することで、  
人は自分をちゃんと生きていけるのだ。

ぼくの役割は、大切なひとを笑顔にすることだ。  
それは、ぼくにしかできない役割。

ぼくの役割がぼくにしかないように、  
あなたの役割も、あなたにしかできません。

あなたが「誰か」になりたくても、「誰か」じゃなく「あなた」になってしまうから。

でも、そんなあなたがいい。

そんなあなたがいいよと、フレデリックと仲間のねずみは言ってるようだよ。

April 27, 2008



文庫: 254ページ

出版社: 幻冬舎 (2001/06)

言語 日本語, 日本語, 日本語

**ISBN-10:** 4344401166

**ISBN-13:** 978-4344401167

発売日: 2001/06

商品の寸法: 15 x 10 x 1.2 cm

やりたい気分の女のシグナルの見分け方。女のエッチはなぜ命がけ?春は妊娠しやすい?女が旅人を好きな理由。ネット不倫にはまりやすい男女のタイプ。ペニスの真珠より愛撫が大事。少女たちは発情している…。男はもちろん、女ですら気づかなかった身体の不思議と女心の永遠の謎を本音で解明する、目からウロコの爆笑エッセイ。

**軽**く、下ネタ書きますんで。

田口ランディさんの、性に関するエッセイ。  
簡単に言うと、セックスとは、女とは、男とは、生きるとは、命とは…

軽いエロ話から入って、いつの間にか深いところまでもぐっていく。

つまり、愛とは。

そう考えるとこまで、持っていかれる。

これを最初に読んだのは、23か24のころだったかな。

ぼくはそのとき、けっこうな衝撃を受けました。



春は妊娠しやすいとか、  
男は体内の3分の1の出血で死ぬのに、  
女は3分の2の出血でやっと死ぬとか、  
卵子は生まれたときに一生分が作られるとか。

そのころ別れた彼女に、心から「ごめんなさい」と思ったりしたのだった。

女性には優しくしなきゃなああと、改めて思うきっかけになったのだけど、  
いまの自分がそうできてるかって言ったら、微妙なとこだな。

微妙だなと思って、28才のぼくはまた、読んでみたのである。

そして、セックスとは、女とは、男とは、生きるとは、命とは...

つまり、愛とは。

4、5年前の自分とループした。

ああ、おれ、ちゃんと抱きてえ。心がつながるセックスをしてえ。やっぱり。

それは別に、今になって思ったことじゃないし、  
心がつながらないセックスばかりをしてきたということではなくて、  
むしろ、いまとなっても、そうなんだということだ。

「えー、でも気持ちいいのは、気持ちいいでしょ」

と、男友達は言った。

「気持ちよくないよ、なんとも思っていない女とやっても」

と、ぼくが言うと、男友達は不思議そうな顔をしていた。

性欲がけっこうあるくせに、「誰か」じゃ満たされないんだから、ややこしい。  
そんな自分はけっこう面倒くさい。

それでも、やっぱり信じてるんだよ。

愛を。

April 28, 2008



文庫: 416ページ

出版社: 小学館 (2007/12/4)

言語 日本語

ISBN-10: 4094082271

ISBN-13: 978-4094082272

発売日: 2007/12/4

商品の寸法: 14.8 x 10.6 x 2.2 cm

26万部突破のロングセラー、文庫化

両親、三兄弟の家族に、見つけてきたときに尻尾に桜の花びらをつけていたことから「サクラ」となづけられた犬が一匹。どこにでもいそうな家族に、大きな出来事が起こる。そして一家の愛犬・サクラが倒れた--。

## 暖

かい場所であつたら、だいじょうぶ。いまは少しちがくても。

兄（はじめ）と妹（美貴）に挟まれた、次男、薫。  
父と母と、そして愛犬、サクラ。

この小説の家族構成は、ぼくに近いものがあって、  
少しばかり親近感を抱いた。

（ぼくは姉と弟に挟まれている）

家族の雰囲気はちょっと違うが、  
子どもにとっての日常、大人になっていく過程、  
それは異口同音に、誰もが経験していくもの。

薫たちは幸せを実感しながらその時代を乗り越えていくが、  
ややこしい問題にも直面していく。

大人になることと、せつないことを同じ意味に感じるとき、  
いつも変わらずそこにいる、優しい気持ちにさせてくれるのは、サクラだった...

ぼくの家の子の名前はコロという。

ペットは飼い主に似るというが、  
人見知りで淋しがり屋で気まぐれなコロを見てると、  
自分を見てるかのような気になる。

そんなコロに何度か救われたことがある。

それはぼくが、彼女とけんかしたりだとか、  
生き方がうまくいかないことがあって絶望したりしたとき。

ほんとうに立てないくらいになってるぼくに、  
コロはしっぽを振りながら、体をすりよせてきて、体重をかけるのだ。

それから、ぼくの顔をなめたりする。

いつもはそんなふうにしらないのに。

コロはわかっているのか。  
ぼくの絶望をわかってくれているのか。

コロの体重がぼくの体に伝わる時、  
見えないあたたかいものが見えた気がした。

それは、愛なんじゃないか。  
それが勘違いでも、それでも。きっと。

家族のかたちがちょっとずつ変わっていったとしても、  
いつかみた暖かい記憶は、  
いまでもだいじょうぶと背中をさすってくれる。

コロが体重をかけてくれるように。

それも、愛なんじゃないか。

小説を読んだあと、ぼくはコロのおなかをさすりにいった。

April 30, 2008



単行本: 150ページ

出版社: マガジンハウス (2008/4/12)

言語 日本語

**ISBN-10:** 483871856X

**ISBN-13:** 978-4838718566

発売日 : 2008/4/12

商品の寸法: 19 x 13.4 x 2.2 cm

『風の谷のあの人と結婚する方法』など、ベストセラー本を次々と世に送り出してきた須藤元気が、これまでさまざまな機会に使ってきたキーワードを、新たな角度から掘り下げてまとめたメッセージ集! 得がたい経験のなかで培ってきた彼の前向きな姿勢が反映された本書で、あなたの世界の捉え方が驚くほど変わります!

「元氣」っていう名前がいいよね。

スピリチュアルな本はたくさんあって、  
みんな同じようなことを言っている印象がある。  
(あくまで印象だけだね)

たぶん、何を言ってるかじゃなくて、  
何かを感じることがあったから、この本を手にとったんだろうな。  
格闘家だった須藤元気が好きなわけでもないんだけど、  
ブルース・リーの言うところの、

「考えるな、感じろ」

そんな感覚に近かったのだ。

スピリチュアルな言葉を必要とするときは、

不安を抱えてるときだろうから、  
どれも素晴らしい言葉に思うのは、当然なんだろう。

でも、その「素晴らしいこと」の全部を、いつでも実践できてたら、  
きっと仏様になれてしまう。

だから、実践できなくてもいいんじゃないかと、ぼくは思う。

できなくてもいいけど、意識し続けることは大切。  
それを忘れそうになったときには、また思い出してみたりして。

意識し続けたいことのひとつを抜粋。

---

愛とは信頼。愛とはほどよい距離。  
不安は猜疑心。不安は支配欲。  
愛を支配や所有で置き換えることはできない。

11ページより

---

信頼し、ほどよい距離でいられるひとたちに、  
ぼくは「愛している」と、伝えます。

そうでいられなくなったひとにもいつか、  
「愛している」と、言えるように。

May 02, 2008



単行本: 194ページ

出版社: 双葉社 (2005/04)

**ISBN-10:** 4575235202

**ISBN-13:** 978-4575235203

発売日: 2005/04

商品の寸法: 19 x 13.4 x 2 cm

駅のホームでいきなり声をかけられ、それがきっかけで恋人になったタケルと千波。だが千波はタケルが自分の家族に会うことを頑なに拒む。その理由を知ったタケルは深く衝撃を受けるが、ある決意を胸に抱く一表題作「優しい音楽」。現実を受けとめながら、希望を見出して歩んでゆく人々の姿が、心に爽やかな感動を呼ぶ短編集。

**優**しい音楽が心に流れる。

お兄ちゃんとそっくりな恋人を見つける、「優しい音楽」。  
不倫相手の子どもを預かる、「タイムラグ」。  
ホームレスのおじさんを拾ってくる、「がらくた効果」。

どれも、ありそうでなさそうな話の短編集。

中学の修学旅行で京都に行ったぼくは、  
京都の人は優しいなあと、文集に書いていた。

道に迷ったそぶりを見せただけで、  
声をかけてくれる京都の人に、えらく優しさを感じたのだ。

そんな優しいひとにぼくもなりたいと。

それから14年の時間を過ごしたぼくは、優しくなったのだろうか。

優しい行為をすることだけが、優しいわけじゃないのだと、  
大人になったぼくは知った。

それは、「相手を想う」ことの深さを理解するようになったから。

この短編集には、「相手を想う」ことで生まれる、「優しさ」が流れている。

仕方なくとか、いやいやながらとか、そうやって物語ははじまるのに、  
いつのまにか、それぞれの想いが誰かに向けられていく。

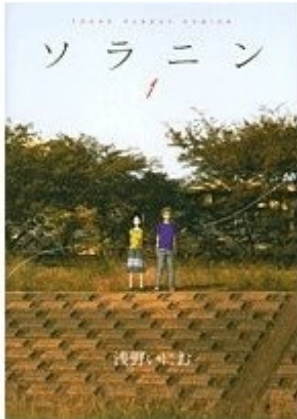
「誰か」だった人の存在が、「その人」になるとき、  
優しい感情は、自然と生まれてくるのだ。

優しさだと気がつかないほどに、  
当たり前のように感じるあたたかいものが流れてくる。

ありそうで、なさそう→なさそうで、ありそう。

そう気持ちが変わっていくとき、流れている音楽はとても優しくかった。

May 03, 2008



コミック: 204ページ

出版社: 小学館 (2005/12/5)

**ISBN-10:** 4091533213

**ISBN-13:** 978-4091533210

発売日: 2005/12/5

商品の寸法: 18 x 12.7 x 1.5 cm

**青** 春とは、何をあきらめて、何を残していくのかを決める作業だ。

と、ぼくは思うのであった。

社会人2年目の芽衣子とフリーター2年目の種田。  
ふたりの、不器用なラブストーリー。  
そして、ふたりを取り巻く、大学時代のバンドメンバーたち。

芽衣子は惰性で生きていることにやりきれなくなり、会社をやめる。  
種田は本気で音楽に取組み始めるが、  
現実を目の当たりにしたとき、折り合いをつける決心をする。  
が、その決断が悲しみを生むことになる。

芽衣子はその悲しみを乗り越えるように、  
種田の思い出と今を生きていく...

たぶん、こういう話はよくある青春群像劇だ。

夢と現実と、自分らしく生きていくことへの折り合い。  
誰かを守っていくことの尊さを、まだほんとの意味でわからないときの、  
あの青春のものがき方。



誰にでも訪れるだろうから、いつだって普遍的なテーマなのだ。

それを「思い出」として読んでるぼくは、  
ある程度、自分の青春時代は終わったと思ってる。

それは、何を残していくのかを見つけたからだ。

何かをあきらめることは、苦しいことかもしれない。  
でも、あきらめることは、自分を失うことじゃない。

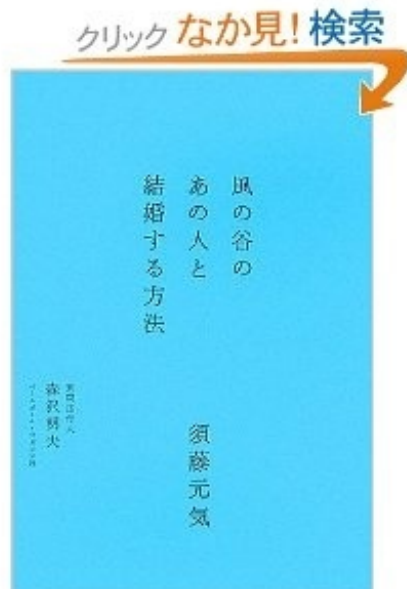
「自分」なんて、何をどう選んだって消えることはないんだよ。

そして、そうやって残った自分を愛することで、  
世界は瞬く間に光を放つのだ。

だから、思いっきり、青春しよう。

泣いて、笑って、自分を愛してみようじゃん。

May 07, 2008



単行本: 184ページ

出版社: ベースボール・マガジン社 (2006/7/28)

**ISBN-10:** 4583038992

**ISBN-13:** 978-4583038995

発売日: 2006/7/28

商品の寸法: 19 x 13.4 x 1.8 cm

効率よく『物質』を生み出すよりも、効率よく『幸福』を生み出すべきである。“幸せとは何か”を綴る須藤元気のエッセイ第二弾。

**気**がいたら、2冊目。

先日の「無意識はいつも君に語りかける」に続いて、須藤元気の本を読んでいた。

ほんとに「読んでいた」って感じ。

内容はまあ、それほど変わらないけど、こっちのほうが軽いテイストというか、深いことを言いながら、ちょっととぼけてみたりしてる分、より、地が出てるのでは？と、思ったりした。

同世代の男として、くすぐられるところもあったり。

「マリオで言うと、スターを取った状態」とか、「安室奈美恵の「TRY ME」がやたらと長く感じた」とか。

おお、わかる！

と、思わずうなってしまった。

印象的だった話は、理想的なリラックス状態は、「水」だという話。

水はどんな器に入れても、その形になれる。

己の形が変わっても、自分自身が水であることのアイデンティティは失わない。

というような話。

どんな場所でも、自分でいられたら、

それはほんとにリラックスして生きていけるなあと思ったりした。

なかなか難しいことだけど、

難しいことでもないのかもしれないと、思わされたのだ。

一言でまとめると、

自分を好きになろうぜ。

っていうことだからだ。

もし、「自分が好きじゃない」と、あなたが言ったら、

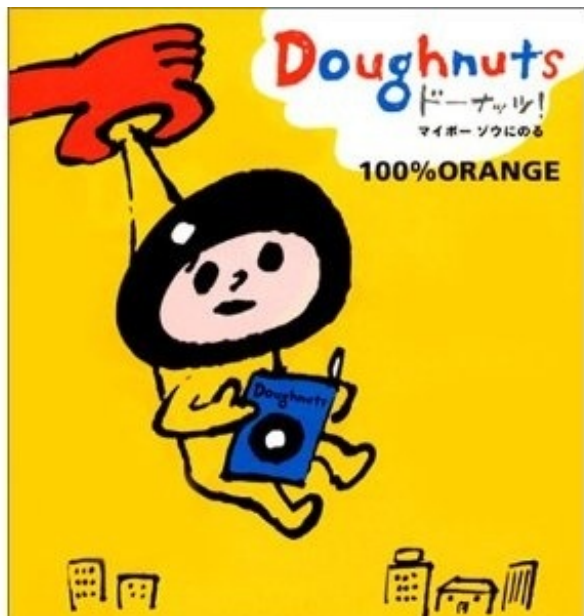
ぼくは、あなたにいうよ。

ぼくは、あなたが好きだよって。

ひとりでも誰かに想われてるってことは、

あなたの勇気になるはずだよ。

May 10, 2008



単行本: 101ページ

出版社: PARCO出版 (2002/09)

ISBN-10: 4891946490

ISBN-13: 978-4891946494

発売日: 2002/09

商品の寸法: 18.8 x 18 x 1.6 cm

100%ORANGEがつくるシュールでキュートで不思議な世界。

これを言葉で伝えられたら、天才だ。

絵本。という枠で片付けていいのか。

うーん、言葉にできない。

何度読んでも。

「すげー」

以外の言葉が出てこない。

元々は詩人のボーリング玉だった、マイボー。  
頭にパンを乗せてないと不安になる、こぶたのブーブ。  
双子のジョディとジョディ。  
マイボーの家の軒先から生えてきた、タケノコ先生。  
指人形のラビーを手放さない、ハローさん...

て、わかります？

だから、読んでもらうしかないんです。

たぶん、「すげー」から。

たとえばぼくは、小さいころ、ご飯に出てくる、焼き魚の目をつついた。

必ず、つついた。

あれって、なんでだったんだろう。

なんでかわかんないけど、そうしてた。

そういう感じ。

たとえば今でも、袋に入ってるパンとかお菓子とか、袋の上から、においを嗅いでしまう。においがわからないのに。

そうする自分を笑っちゃったりする。

そういう感じ。

て、わかります？

うーん、やっぱり伝えられない。

と、凡人のぼくは100%ORANGEの非凡さを、伝えられないのだった。

くっそ〜。

May 15, 2008



文庫: 222ページ

出版社: 新潮社 (2005/10)

ISBN-10: 4101233411

ISBN-13: 978-4101233413

発売日: 2005/10

商品の寸法: 15 x 10.6 x 1.6 cm

「四国を入れ換える」とは、いったいどういうことなのか??Let's錯覚!とは?田中一郎って??一意表を衝く発想を独特のタッチで長閑に描く、マンガの枠に載せた新しい笑いの実験本。「ミニ象」や「忍者ちび丸」でほのぼのさせたかと思いきや、錯視図形・電気回路で急転ハッとさせる、破天荒かつインタレストな、油断のならないショート・コミック集。

**詩** 的コトと名づけよう。

「ねっとのおやつ」というネット配信されたアニメーションを、一冊にまとめた本。

「だんご3兄弟」、「ピタゴラススイッチ」の生みの親。と言ったらわかるかな。

佐藤雅彦さんの発想は、「四国はどこまで入れ替え可能か」という域を超えて、たぶん、宇宙まで続いているに違いない。

宇宙まで続いているから、日常の些細なことを、いろんな方向から見るができる。

たとえば、

未来をずばり当てようという占い師

↓

身近な人に不幸が起こると予言

↓

占い師の頭の上に棒が落ちてきて、当たる。

とか、

チャンネルを変えすぎるリモコンにテレビが激怒。

↓

うるさいなあ、とテレビを切るリモコン。

とか、

山田正正一 → 山田正 6票

吉田正一正 → 吉田正一 5票

とか、

掛け算の9の段の答えの一桁目と二桁目を足すと、  
答えは全部9になる。

とか。

見方を変えるという作業は、こうしてみると簡単に思えるけど、  
やわらかい発想がないと永遠に気がつくことはない。

気がつかなくても、生きていけることに気がついてしまっていて、  
その発想の芽を摘んでいたりはしないか。

気がつかなくても、生きていけるけど、  
気がついたりすると、同じだと思ってた世界がまた新しく見える。

それって、すごく楽しいよね。

数学が好きだったという佐藤さんだけど、  
言葉はどこか詩的だ。

ぼくが好きなのは、これ。

---

カエル's Life

カエルのおふるは

コーヒーカップ

水でうすめてもらおうと

アメリカン

(C)masahicomic 2001

---

たったこれだけで、笑っちゃう。

「詩」って情緒的なものになりがちだけど、  
これも「詩」と呼んでいいんじゃないか。

ほんとはこんな詩を書きたいと思ってる。

May 17, 2008





単行本: 160ページ

出版社: マガジンハウス (2007/12/13)

言語 日本語, 日本語

ISBN-10: 4838718233

ISBN-13: 978-4838718238

発売日: 2007/12/13

商品の寸法: 18.6 x 13.2 x 2.2 cm

イベントコンパニオンをしていた長島千恵さんは23歳の秋、左胸にしこりがあるのを発見、乳がんとの診断をうけた。ちょうどそのころ赤須太郎さんから交際を申し込まれ、悩みに悩んだが「一緒にがんと闘おう」という言葉に動かされ、交際がスタートした。しかし、がんの進行は止まらず、去年7月に乳房切除の手術をせざるをえなくなる。それでも治ると信じ、SEの資格を取り再就職し、次第に病気のことは忘れていった。ところが、今年3月、激しい咳と鋭い胸の痛みに襲われ、主治医の元に。胸膜、肺、骨にがんが転移していたのが判明。筆舌に尽くしがたい痛みとの闘い。そして、ついに千恵さんは…。最後まで人を愛し、人に愛され、人を支え、人に支えられた24年の人生を生き抜いた長島千恵さんからのラスト・メッセージ。

**本** 当の痛みを、知ることはできないけれど。

23才で乳癌を患った、長島千恵さん。  
恋人と家族と友人に囲まれ、最後まで癌と闘い、  
自分らしく生きようとした姿を綴った、ノンフィクション。

読んでいる間、ずっと、震えが止まらなかった。

その震えは、彼女を取り巻くものが、  
ぼくの想像しているものよりずっと大きいのだろうという、震え。

たとえば、「痛み」。

たとえば、「幸せ」。

たとえば、「感謝」。

たとえば、「生きること」。

ぼくには、彼女の本当の痛みを知ることはできない。  
それは、彼女の恋人でも家族でも友人でも、誰でも。

でも、この震えは、きっと、

「明日がくるのは奇跡」と言った、彼女のメッセージが届いてる証だ。

だから、人を愛そう、人に愛されよう、人に感謝しよう、幸せを伝えよう。

素直に、そうぼくは思った。

彼女は恋人（太郎さん）の存在を、「愛」という言葉では表せないと言った。  
ぴったりの言葉が見つからないのだと。

「愛」を超える存在。

死と向き合う機会の少ない現在のぼくでも、  
その言葉と出逢うことがあるのだろうか。

わからない。

それでも、自分らしく。

そんなふうに思わずにはいられなかった。

May 18, 2008



単行本: 296ページ

出版社: 講談社 (2006/4/7)

ISBN-10: 4062134128

ISBN-13: 978-4062134125

発売日: 2006/4/7

商品の寸法: 19 x 12.2 x 2.4 cm

1980年代の早稲田大学を舞台に、気鋭の新星が描く、スーパー・マイナーな技術「速記」に懸けた青春。  
美女に釣られて、速記研究会。

「本多くんはさそんなに役に立つことが好き？」「えっ？」「そんなに、『役に立つこと』、好き？」くっきり、はっきり。そして、悪戯っ子ぽい笑顔を浮かべて、更にこう言った。「そういうのって、『豚に喰われる』って感じかな」  
<本文より>

## 役

に立たないことが、世界を作るのだ。

会社の人事異動で高松から旭川へ転勤することになった、本多丈晴。  
荷物の整理をしていると、なくしたと思っていたカセットテープを見つける。  
そのカセットテープを再生すると、記憶が大学時代へと巻き戻っていった。

1980年代の早稲田大学。  
バンドサークルに入ろうと思っていた、さえない新入生、本多丈晴は、  
同じ1年生で美人の田畑希美に声をかけられ、速記研究会に入ることに。

何の役にも立ちそうもない思いながらも、  
希美といたい一心で、速記に青春をかける。

そこに、肘を壊した野球部の元エース、黒田一行が現れ、  
不思議な三角関係を築いていくことになる...

「速記」がテーマになるのかと疑いながら読む、おれ。

結論、なっちまった。

たぶん、どんなマイナーなことでも、「青春」になりうるということだ。

ましてや、舞台が早稲田大学。

ぼくは大学には行っていない。

でも、早稲田の学食でバイトしてたことがあって、年代は違うけど、登場する地名やら、お店やらが懐かしくて、きゅんとなったりした。

「さかえ通り」、「箱根山」、「第一学生会館」...

ぼくは大学には行っていない（2回目）。

でも、そこで友達になったのは同年代の早稲田の学生で、こっそり授業なんかも受けたりもしてた。

友達と飲んだり、遊んだり、泊まったり、出かけたり、早稲田じゃなく、立教のキャンパスに夜に忍び込んで、なんちゃらの部室で友達と寝たりもした。大隈講堂の前で夜を明かしたことも。

そして、初めてキスをしたのは、1つ年上の教育学部の子で、初めて付き合った彼女は、1つ年上の文学部の子だった。

なーんていう、ぼくなり青春と重ねるように、この小説に引き込まれたのだった。

それでも、読後感がセピア色に染まらなかったのは、主人公である本多が、カセットテープに郷愁を覚えながらも、今の妻である、「カバ」にこう言うからだ。

「今はカバが好きだ。愛している。笑うなら笑えよ。でも、おれは今、カバに言うべき時だと思うんだ」

と。

「そういうとき、「今は」って言っちゃだめでしょ」

と、カバは笑う。

青春の記憶から巻き戻ってきたとき、笑ってられる世界がそばにあったらいい。

いまが笑えないときなら、役に立ちそうもないことに、目を向けるのも悪くない。

それが世界を作っていくのだからさ。

おれは、笑ってるよ。



文庫: 218ページ

出版社: 新潮社; 20刷改版 (1994/03)

言語 日本語

**ISBN-10:** 4101315116

**ISBN-13:** 978-4101315119

発売日: 1994/03

商品の寸法: 15 x 10.6 x 1.2 cm

児童文学者協会新人賞 児童文芸新人賞 ポストン・グローブ=ホーン・ブック賞他受賞多数 12歳の夏、ぼくたちは「死」について知りたいと思った。そして、もうすぐ死ぬんじゃないかと噂される、一人暮らしのおじいさんを見張り始めて...? 三人の少年と孤独な老人のかけがえのない夏を描き、世界十数カ国で出版され、映画化もされた話題作。

スタンド・バイ・ミー的、世界。

やせっぽちの木山、デブの山下、メガネの河辺。

山下がおあばさんの葬式に出席したのをきっかけに、  
3人は、「死」というものに興味を持つ。

死んだら、どうなるんだろう。

河辺が新しいメガネをかけてきた日、  
木山と山下は河辺にこんな提案をされる。

もうすぐ死にそうな、一人暮らしの老人を観察しないか。

小学6年生の夏、3人は「死」を見るために、あるおじいさんを観察することにした。

やがて、おじいさんにそれがバレて、3人とおじいさんの交流が始まる。

そして、最後には、おじいさんの「死」と出会うのだった...

こどものとき、「死」は恐怖だった。それは、意味がわからなくて、「わからないものが怖い」という類の、全身で感じる感情だった。

わからないから、感じていたかったのだ。それが恐怖であっても。

おとなになっていっても、「死」は相変わらず、恐怖だ。

でも、あの全身で感じる恐怖とは違っている。おとなのぼくたちは、生と死がつながっていることを知っている。

「死」へと向かう痛さや、苦しさは怖いんだけど、「死」そのものが、もはや怖いものではなくなった。

3人は、おじいさんとの出来事を心に刻むことで、死ぬことの答えを知った。

こどもは自分がこどもだとは思っていない。

なぜかという、ぼくがそうだったから。

こどもはこどもの小さな世界が、世の中のすべてだと思っている。

なぜかという、ぼくがそうだったから。

それが小さいと気がつくのは、こどもじゃなくなってからだ。

小さな世界で、ちゃんと見ることはたいせつ。

そしておとなはそれを見守れることが、たいせつ。

気づかないうちに、おとなになっていたのなら、気づかないように、見守られていたのだ。

野球をしてれば、ほぼ幸せだったぼくも、ときどき、おとながドキッとするような危険な遊びもした。  
(たま～にね)

それも、たぶん、見守られていたのだ。



雑誌

出版社: 文藝春秋; 隔週刊版 (2008/5/22)

ASIN: B0019EUKQU

発売日: 2008/5/22

商品の寸法: 26.4 x 19.8 x 0.6 cm

**F**Wの気持ちで行こう。

サッカー九州リーグで266ゴールを記録した、西真一さんの物語。

めぐり合わせというのは、どんなふうによってくるかわからない。

鹿屋体育大学から推薦枠のオファーを受けながら、  
筑波大を受験し、失敗。  
鹿屋体育大を受験し直すが、これも失敗。

唯一受かった、鹿児島経済大に進むことになる。

卒業後は消防士を目指すが、失敗。

町役場に就職する。

役場に勤めながら、「ヴォルカ鹿児島」という4部リーグに所属。

Jのチームから興味を示されることもあったが、  
結局オファーには至らず。

JFL昇格に全力を注ぐが、  
昇格をかけたザスパ草津との試合に敗れてしまう。

そして、引退。

一言で言えば、「無名の選手の、めぐり合わせの悪いストーリー」だ。

でも、心をうつ姿がそこにはあった。

たとえば、受験に失敗したときに彼が決めたルール。

「与えられた環境でやりぬくこと」。

たとえば、消防士の試験に失敗したあと、  
役場で福祉課に配属され、障害者と向き合ったとき、

「難しい状況にある人たちが日常を不自由なく過ごそうとしている姿に、  
些細なことでウジウジしているのはバカらしいと思うようになった」。

そして、チームに対して、

「愛する故郷のチームでJFL昇格への道すら作れなかった」。

もし彼にあと少しの運が味方になっていたなら、  
もっと華々しい世界が待っていたのかもしれない。

でも、あと少しの運がまわってこないことなんて、  
生きていけばいやというほどあったりする。

うまくいかないこと、なんだかだめになってしまいそうなこと。

そんなとき、ぼくは彼の言葉を思い出すだろう。

「落ち込んでいる時間は、何にも繋がらない。  
FWのプレーと同じ。シュートを外しても、次の手をすぐに考える。  
そして、また、シュートを打つ」

うまくいかないことなんて、あたりまえ。

それでも266回も輝けるのが、ぼくたちの住む世界だ。

May 27, 2008



# 「イージー・ゴーイング」 山川健一

---



単行本: 244ページ

出版社: アメーバ・ブックス (2004/10/30)

**ISBN-10:** 4902843005

**ISBN-13:** 978-4902843002

発売日: 2004/10/30

商品の寸法: 19.2 x 13.2 x 2.4 cm

なにかに迷ったり悩んだりしている人、頑張りすぎて疲れてしまった人...に優しく語りかける著者最新の癒し系エッセイ集。「弱い自分、ありのままの自分をそのまま受け入れよう」「無理しないでね」「気楽に生きよう」等、幸せになるメッセージの数々。

## エ

レガントなおとなになるために。

「エレガント」っていうと、気取ってる感じがするかもしれないけど、つまりは、「自分のスタイルで生きること」だ。

とあるスクールで、山川さんとお会いして、話を伺ったとき、ぼくは「こういうおとなになりたい」と思った。

正直、憧れるおとなは、それまでにもいたけれど、それはどちらかという、ぼくにないものをたくさん持っているひとで。

有名人で言うなら、ロベルト・ベニーニとか、新庄剛志とか、スキーの原田雅彦とか。

でも、そんなふうな生き方をしようと思うと、ぼくは無理をしてしまうことに気がついていた。

無理をしないで自分らしく生きていくおとな。

そして、それがカッコよくて、ぼくの思考に近いおとな。

ぼくにとってそれが、山川さんなのだ。

ぼくが直接伺った話に心躍らせたように、  
この本のメッセージも深く心に染み渡った。

たとえば、悲しみを上手に感じること。  
たとえば、上手にあきらめること。  
たとえば、自分の中の弱さを知ること。

ネガティブの波に会ったら、無理して浮上しない。

その波に逆らわず、ちゃんと感じておく。  
感じておくから、時にはがんばりたくなる。

そうか、がんばるために生きてるわけじゃないもんな、と思う。

楽しかったり、面白かったりするこの結果、  
がんばってたのなら、とっても素敵なことだ。

そんな、甘いこと言ってもらえないよって言うこともあるかもしれない。

でも、ぼくが信じてるものがそこにはある。

言葉は力を持つてる。

発した言葉はいつか自分に返ってくる。

だから、自分の美しい想いを言葉にする。  
自分は美しい人間ではないとしても。

「想い」は、誰かを、自分を変えていくから。

これがぼくのスタイル。

ベニーニになれなくても、ぼくはぼくになれるのだ。

May 30, 2008



単行本: 203ページ

出版社: 角川書店 (2006/07)

ISBN-10: 4048735837

ISBN-13: 978-4048735834

発売日: 2006/07

商品の寸法: 19.2 x 13 x 2.2 cm

教室に紙飛行機が飛びはじめる。始まりの合図だ。もうすぐ崩れだす。でも、教師はまだ気づかない。日本の平和ボケは、学校の間でも存分に発揮されている。生温い方法では、もう追いつかなくなってしまうのだ。「今なら、なんとかなるはずだよ」。私は祈るような気持ちで崩れていく学校を見ていた…。この温室のどこかに、出口はあるのだろうか。ふたりの少女が起こした、小さな優しい奇跡。ひりひりと痛くて、じんじんと心に沁みる。『幸福な食卓』の気鋭が贈る、とびきりの青春小説。

Y と先生とぼくのこと。

学校という温室の中で、心をもて余す子どもたち。  
モノを壊す衝動にあきたら、次の対象は「人」。  
ふとしたきっかけで、いじめがはじまる。

みちるは、そこに居続けることを選び、  
優子は、そこから逃げ出すことを選ぶ。

進んで有能なパシリとして過ごす、斉藤君。  
スクールサポーターになってしまった、講師の吉川。  
やくざの子どもであることに劣等感を持つ、瞬。

彼らに救われながら、彼らを救いながら、  
ふたりは崩壊しかけている学校に、小さな奇跡を起こす…

ぼくが過ごした学生時代は、とても平和だった。  
「平和」というのは、目に見えて何か問題が起きた事がないということ。

少なくとも、自分がいた場所で、  
わかりやすくいじめとか、暴力沙汰とか、  
器物破損とか、授業妨害とか、そういうことはなかった。

あっても、可愛げのある程度だった。

だから、崩壊した場所で、自分がどのような立場を取るのか、  
ちょっと想像できなかつたりする。

今の自分ではない、中学生の自分が、  
どうやってそれを目の当たりにするだろう。

そこは居心地のいい場所ではないとしても、  
その場所を感じる「何か」は、自分を成長させるかもしれない。  
とも、思った（自分を壊す可能性もちろんあるけど）。

「やくざの子ども」である伊佐瞬という登場人物がいるが、  
中学生のとき、クラスメイトに、そういうやつがいた。

彼を、Ｙと呼ぶことにしよう。

Ｙは、瞬と同じように、学校に来たり来なかつたりだった。

そんなＹとの付き合い方は、はっきり言ってわからなかった。  
わからなかったけど、ぼくはＹのことがとても気になっていた（変な意味じゃないよ）。

ときどき話すこともあったけれど、  
ほとんど話す機会がなかった。

でもそれは、ただ、話そうとしなかつただけなのかもしれない。

あのとき、もっと話そうとすれば、  
何かがあったかもしれない。

瞬の心の内のように、  
Ｙにも同じような闇があったんじゃないか。

それを知って、中学生のぼくが何をしたのかわからない。

でも、できることがあったんじゃないか。

ぼくはよく、Ｙとのことを担任の先生と話した。

「Ｙのこと、どう思う？」

「まあな、難しいよな」

と、先生はそう言った。

「未完成の人間が、未完成の人間を教えるんだから、  
教師という仕事は、ほんと難しいよ。  
だけど、きみのような生徒と出会うことが、教師としての喜びかもな」

そのとき、おとなも悩んでるんだとぼくは知った。

平和なぼくらにも、悩み事はたくさんあった。

きっと、Ｙにも先生にも。

June 02, 2008



単行本: 135ページ

出版社: 講談社 (2005/11)

ISBN-10: 4062131935

ISBN-13: 978-4062131933

発売日: 2005/11

商品の寸法: 16 x 13 x 1.4 cm

もしも2匹が大人の男と女だったらなら??

大ヒット絵本の著者が贈る「本物の恋」をするための恋愛エッセイ

- 生きる=恋をするということ
- 好きな相手の前で素敵に振る舞うには
- 色気はどこから生まれる?
- メイに学ぶ守られる女
- ガブの"可愛さ"について
- 恋愛体質をつくる重要ポイント
- めざせ「飽きられない女」
- 恋はいつだってハッピーエンド etc.

人は恋をするために、うまれた。

きっとこれを映画のあとに読んでいたのなら、  
深く心に刻まれたのに違いない。  
まあ、別れを理解してない時期だったからね。

でも、2008年のぼくは、

「まあ、一般的な恋愛論だね」  
という程度の感想だ。

別にぼくが、恋愛上手になったわけでもなく、  
誰かを好きになったり、付き合ったり、振られたり、  
誰かの恋愛話を聞いたり、読んだりしてるうち、  
恋愛の「形」が見えてきたからだと思う。

「こうすればうまくいく」とか、  
「こうしてしまう心理はこうだ」と、  
それがわかったところで、どうってことないのだ。

だって結局、恋はしようと思ってできるんじゃなく、  
勝手にしちゃうもんだから。

勝手にしちゃうものに、  
「こんなふうによせよ」と指示を出されても、  
正直しんどい。

恋にはおぼれりゃいいんじゃないの。

で、浮き上がって、まわりを見渡したときに、  
それでもなお、相手を愛しいと思えたら、  
それは愛がはじまったしるしだ。

そこからがきっと、人間らしい美しい付き合いなんでしょう。

恋を端折って、愛からはじめたいと、最近のぼくは思うが、  
それは本物の異性愛ではないかも。

「人」に対する「愛」ではあるかもしれないけど。

まあ、恋をたくさんして気がつくことがいっぱいあるのはいいことだけど、  
それでも、一定の倫理や道德を持っておかないとね。

人も動物だけど、  
人にしかない美しさを持って、恋愛しないとね。

ガブは、オオカミだけど、美しい男だよ。

ほんとにね。

June 05, 2008



文庫: 480ページ

出版社: 講談社 (2005/2/15)

言語 日本語

**ISBN-10:** 406274998X

**ISBN-13:** 978-4062749985

発売日: 2005/2/15

商品の寸法: 14.8 x 10.6 x 2 cm

人生は必ずやり直せる。大人への応援歌。見知らぬ男に抱かれる妻。家庭内暴力の息子。リストラされた38歳の僕は、交通事故死した親子に出会い、その車に乗って再生の旅に出る。著者渾身の感動作。

父の日の一冊に。

最近、自分の年齢を言うと、「独身？」とか聞かれる事が増えてきた。

28才は、結婚してたり、子どもがいたりするのに、わりとふさわしい年齢だもんな。

まるで、そんな気配を見せない自分でも、そんな年になったのだと、ふと思ったりする。

気配はないが、どんなふうにも家族を築いていくんだろうという興味が、以前より大きくなったのは確かだ。



「父親」とはなんだろう。

この小説を読んで、考え出したのは、そこだった。

38才の「僕」は、幸せな家庭を築いてきたはずだった。  
だが、「僕」は会社をリストラされる。  
息子は中学受験に失敗し荒れ始め、妻は他の男をあさるようになり、  
家族は崩壊しかけてしまう。

死んじゃってもいいかなと思っていると、  
「僕」の前に、5年前に交通事故死した父子の乗った、  
不思議な車が現れる。

その車に乗り込むと、「人生のやり直し」をしたい場面へと連れて行かれる。

そして、現実の世界では、もうすぐ死んでしまう父親が、  
38才の時の姿で、「僕」の前に現れる。

現実の父親を嫌いになってしまった理由、  
息子の心の中の闇、妻が男をあさってしまう理由を、  
やりなおしの世界の中で、知っていくことになる。

でも、知ってしまうだけで、現実が変わることはない。

ぼくは死ぬことを選ぶのか、それとも...

という、ファンタジー要素の入ったお話。

でも、父親と息子という関係性の描き方は、リアル。

リアルだと感じたのは、ぼくも父親にはあまり心を開いてないからだ。

それは父子には少なからずある感情だと思う。

たとえば、自分が嫌だと思っている部分を隠して生きたいのに、  
それを父親の仕草の中に、安易に発見できてしまうこと。

なのに、自分がよいと思うことに、父親は反応しない。

血がつながっているのに、子どもの気持ちはわかっていない。

それは、ただのわがままなのだけど、  
思春期くらいの多感な時代に、それを感じてしまうと、  
絶望してしまったりするのだ。

でも、同じように、子どもも父親の気持ちはわかっていない。  
それはそうだ、子どもは永遠に親の子どもなのだから。

だから、この小説のように、今の自分と同年の父親と話してみたい。

思えば、父親は、今のぼくと同じ年のときはもう、  
ぼくと姉ちゃんと二人の子どもの父親になっていたのだ。

ぼくらの将来や、明るい未来に希望を燃やしていたのかい？

息子が28になったときには、  
孫でも抱いていたいな、とか想像して、喜んでいたのかい？

残念ながら、28のぼくは結婚すらしてないよ。

父親の本当の気持ちを知っても、  
ぼくが父親にならない限り、本当の意味で、「父親」というものを、  
わかることはないんだろう。

だから、ぼくはまだ、父親に素直になれないところがあるのだ。

本当のことは、ときには誰かを傷つけるとしても、  
それを知っていると知っていないでは、  
できることの範囲が違ってくるはずだ。

だからせめて、この本を父の日にプレゼントすることにした。

本を読むような人じゃないけど、「ありがとう」の代わりに。

June 07, 2008



文庫: 302ページ

出版社: 徳間書店 (1999/06)

**ISBN-10:** 4198911304

**ISBN-13:** 978-4198911300

発売日: 1999/06

商品の寸法: 15.2 x 10.6 x 2 cm

高知の高校を卒業した杜崎拓は、東京の大学に進学し、一人暮らしを始めた。その矢先、同郷の友人から武藤里伽子が東京の大学に通っていると聞く。里伽子は高知の大学に行っていたのではなかったのか?拓の思いは、自然と2年前のあの夏の日へと戻っていった。高校2年の夏の日、訳あって東京から転校してきた里伽子。里伽子は、親友が片思いする相手だけだったはずなのに…。その年のハワイへの修学旅行までは…。

高知、夏、17才。

杜崎拓は、東京からの転校生、武藤里伽子に振り回されたり、松野との友情を大切にしながら、17才の夏を過ごしていく。

里伽子は女性からみたら、小悪魔的な、嫌な女だと思う。で、それに惹かれる、松野と拓を、バカだと思う女性はいないんじゃないかとも思う。

いやー、でも、それはこの際、関係ないんだ。

男のぼくから見た、拓の心情はよくわかるし、むしろ憧れたものだ。

拓は、なんというか、ぼーっとしながらも、目の前のひとつひとつの問題に、向かっていく感じの男。

松野は、先のことまで考えたり、思慮深かったり、人に優しくしようとする、クールな感じの男。

このふたりの友情があるからこそ、

里伽子の小悪魔的な雰囲気のにまれることなく、  
きれいすぎるほどの青春を感じたりする。

それは、28才のぼくが青春を振り返って、きれいだと感じるのではなく、  
15才くらいだったぼくが見ても、きれいだし、かっこいいし、青春だと思ったのだ。

里伽子がベッドで寝てしまって、  
仕方なく、拓はお湯の入ってないお風呂に横になり、寝たりする。  
「ぼくだって十分、かわいそうじゃんか」  
と、つぶやきながら。

いまもそんな拓が、かっこいい。

そして、ぼくがいまになって、思うのは、松野のかっこよさだ。

松野は、もともとクールで落ち着いていて、  
青春当時のぼくから見ると、あまりに大人に見えてしまっていたせいか、  
そこまで、かっこいいと思えなかったのだ。

でも、松野の拓に対する思いやり、  
里伽子に「土佐弁しゃべる男なんてきれい」と言われながらも、  
里伽子を気遣う、その思い。

それが、なんてかっこいいんだと今は思う。

そして、大人な雰囲気の松野が、  
一度だけ拓を殴ってしまうシーン。

卒業後、再会した松野は、拓に、  
「あのとき殴ったのは、おまえがおれに遠慮しゆうのがわかったきぞ。  
あのときまで、気づかんかった、おまえが武藤のこと好きやったこと」  
と、松野は、拓に謝る。

クールな松野も、いち高校生だったんだなあと、  
いまになって思って、実は思ってたより、大人でもなかったのかなあと、  
なんだかちょっと安心したりした。

それでも、高校生としては、十分大人に見えるけど。

そう、それと同時に、拓も普通の高校生でありながら、  
松野との会話は、そこだけ「高校生」という枠がなくなったように、  
親友同士の密な雰囲気が流れる。

たぶん、ぼくが憧れるのは、それなのだ。  
それがめっちゃめっちゃ、かっちょいいのだ。

青春時代のど真ん中を描きながら、  
十年以上たったいまもセピア色を感じることもないのは、  
このふたりの友情が、今も続いているような気がするからなのかもしれない。

里伽子との恋愛的雰囲気の受け止め方は、ちょっと変わったけれど、  
松野との友情を思うとき、あのころと何も変わってないと思うことが、  
ちょっとうれしいと、ぼくは思っている。



単行本: 206ページ

出版社: 角川書店 (1998/03)

**ISBN-10:** 4048730843

**ISBN-13:** 978-4048730846

発売日: 1998/03

商品の寸法: 18.6 x 12.8 x 2 cm

ビールの好きなしろくまの話、自信のないらいおんの話、小鳥のるるちゃんとそのお姉さんの話、失恋してでかけた海の話。まんがで綴った、小さな、心にしみる童話集第3弾。

**さ** よならって、美しい言葉だね。

一編が4ページほどの小さな詩のような絵物語集、「てのひら童話」の3冊目。  
(マンガでもあるけど、マンガという表現はちょっと違う感じ)

この中で印象に残ってる言葉がある。

学校の屋上での、「わたし」と友達の会話。

20コも上の人と付き合ってる友達が、  
夕暮れの中で「わたし」に言う、言葉。

「傷つくのは、傷つくほうも悪いと思うねん。  
傷つけようと思って傷つける人なんて、あんまりおらんもん」

その友達は、屋上から身を投げてしまうという、  
とても悲しい話なのだけども。

この本を読んだのは、10代の終わりか20代の初めだったと思うのだけど、この言葉は、傷つきそうになるたび、思い出した。

いや、実際に傷ついているときでも、思い出していた。

傷つけようと思って、傷つける人なんて、あんまりいない。

そう思うと、傷つかなくていい自分に気がついたりした。

いまこの瞬間も、世界中で、誰かが誰かを傷つけてしまってる。でも、そのほとんどは、傷つけようと思って傷つけているわけじゃない。

はず、だ。

傷つける人がいたとしたら、それは、心の淋しい人なのだ。

そして、人はそういう状態になることがあるということ。

かつて、ぼくを傷つけた人、あなたは淋しかったんだね。いつか、ぼくが傷つけてしまった人、ぼくはそのとき、淋しかったんだよ。

だから、おあいこだね。

そうやって、そうやって生きていこう。

いろんなものと、出会いながら。

いろんなものと、さよならしながら。

July 04, 2008



単行本（ソフトカバー）：104ページ

出版社: 講談社 (2007/10/26)

言語 日本語

**ISBN-10:** 4062140659

**ISBN-13:** 978-4062140652

発売日：2007/10/26

商品の寸法: 19.8 x 14.8 x 1 cm

疲れたな、と感じたら、不思議な世界の住人が、  
あなたをきっと、迎えに来る。

きちんとした生活を好む女性、日菜子の日常を描いた、穏やかで不思議な物語。  
一見、普通に見える暮らしも、実は鳥しかいない、謎めいた世界が広がっていた……。  
やさしい鳥たちとの出会い、思う存分のんびりとできる暮らし。毎日、穏やかな生活を送っているが、彼女はなぜ、この世界に足を踏み入れてしまったのか!?  
このまま一生、この世界で暮らすのか、それとも……!?  
忙しい日々を送っている人なら、きっと日菜子に共感できる。疲れた心に、穏やかな空気がそっとしみるストーリー。

**終** わることのない、夏休み。

こどもは夏休みで、さぞ楽しい毎日を送っているだろうって、  
そんなことを思うのは、おとなから見たこどもだから。

「遊ぼうぜ」と言えば、誰かと遊べる放課後のほうが、よっぽど楽しい毎日のはずだ。

わざわざ約束しなくちゃ遊べない夏休みは、こどもにとっては、不便でしかたない。

という、こどもだったのだけど、みなさんはいかが？

「何もないところで、ゆっくりしたい」。  
そう思うことは、おとなになるほどに多くなる。  
こどもだったら、なにもないところで、ゆっくりはできない。  
なにもないことに、はしゃいでしまうからね。

日々の忙しさに疲れたOL・日菜子が、  
なにもなく、ゆっくりしている「鳥の国」に招待される。  
わけのわからないまま、「鳥の国」にたどりつき、  
望みどおり、なにもなく、ゆっくりと時間をすごしていく。

失っていた子どものころの記憶をたどりながら、  
日菜子はきっと、正しい心を取り戻した...に違いない。

それは、飛ぶことの必要のない「鳥の国」で、  
鳥が飛ぶことに目覚めるような感覚。

たぶん、そういうのが、「正しい心」だとぼくは思ってる。

わざわざ約束しなくちゃ遊ぶどころか、  
会う事だってままならないのが、おとなの世界。

それは、ある意味、終わることのない夏休みなのかも。

なら、子どものころの退屈な夏休みよりも、  
実はずっと楽しい夏休みだよな。

枕元にこの本を置いておけば、  
いくらかはゆっくりとできそうだ。

July 24, 2008





雑誌

出版社: 文藝春秋; 隔週刊版 (2008/7/31)

ASIN: B001D16H1G

発売日: 2008/7/31

商品の寸法: 26.4 x 19.8 x 0.6 cm

日本人だという誇りを。

オリンピックが開幕したからといって、  
そんなナショナリズムを感じているわけでもないのだけど。

でも、最近、日本人であることを、「よかった」と思うことがよくある。  
もしかしたらぼくの場合、そのきっかけは、  
イビチャ・オシム元サッカー日本代表監督だったのかもしれない。

たとえば戦争を、忘れてはならないと、  
ユーゴの内戦の中を生き抜いたオシムは、言う。  
その理由は、忘れてしまったら、また始めてしまうからだ、と。

ペンひとつで、戦争が始めることができることを知っている彼は、  
けして、答えをすぐに見せることはしない。  
いろんな選択肢があるのだと、考えさせる。

そして、日本人には日本人のよさがある、と。  
たとえばサッカー王国のブラジルの真似をしたところで、  
日本はブラジルになれないのだ。  
それでも、日本が世界と戦う道しるべはある。  
それは、本来の日本人の中にある、と。

それを、考えろ、と。

サッカーでは後進国でも、野球は世界一だ。  
WBCでも世界一に輝いた、まぎれもない世界一の国。

ゆえに、誇りがある。  
すべてのやり方が、いいとは思わなくても。

ただ、野球日本代表キャプテンの、宮本慎也は、こう言葉にする。

「日本人は昔から正々堂々とするのが大事だと言われてきました。  
たとえ勝負の世界でも、行動に生真面目さがあったと思います。  
汚いことをすれば必ず勝てるということではありません。  
それなら後ろ指をさされるような立ち振る舞いはしない。  
それが日本人ではないでしょうか。」

プレー中のズルさは必要だが、グラウンド外でそういう行為はすべきでない、と。

その言葉に、ぼくは日本人であることの、誇りを感じる。

道端に財布がおちていれば、  
それは神からの贈り物だと考える国がある。  
女性が一人で歩いていれば、  
ナンパするのが礼儀だという国もある。

うん、それでいいよ。  
それが価値観というものなのだから。

でも、日本人が、いや、ぼくがそれとは違うということに、  
いまは誇りを持てる。

だから、勝負には負けたくないけど、  
美しくない勝ち方をしてまで勝つことに、  
ぼくは意味を見出せない。

それは平和な国の甘言だとしても、  
いいじゃないか、戦争をしないと誓った国なのだから。

と、思わぬ社会論にまで発展してしまったけれど、  
オリンピックは始まっている。

選手のみなさん、別に国を背負うことはありません。  
思うがまま、精一杯プレーしてください。  
それにぼくらは、感動するのですから。

できれば、美しく勝つことを。  
負けても美しく散ることを。

日本人も、外国人も。



単行本: 110ページ

出版社: メディアファクトリー (1994/07)

ISBN-10: 4889913181

ISBN-13: 978-4889913187

発売日: 1994/07

商品の寸法: 18.4 x 13.4 x 1.2 cm

「ボクのを、どうしかわかってくれないの?」とシッタカブッタはじたばたと苦しみます。恋するとつい思い込んでしまう心の動きの数々と、立ち直っていく姿を、楽しいイラストと言葉で見せてくれます。それは人生の見方のヒントにもなります。「心」を語るマンガ「ブッタとシッタカブッタ」の作者が描く、恋に悩む人への贈り物。

**愛**は、ただ愛するだけ。

恋をして、失恋をして、苦しんで、  
その苦しみから立ち直っていく過程を、  
シンプルな言葉で描いています。

シンプルなゆえ、  
そうか、人を好きになると、シンプルだったことが、  
とてつもなく難しいことになってしまうのだ、  
ということを知ります。

たとえば、ぼくが好きな人にあげる愛が、  
そのひとの愛とは関係がないとき、  
ぼくはその人を苦しめていたのだな。

わかってはいたけれど、  
その人を「ただ愛する」ってことができてなかった。

関係のない愛を背負って、  
誰かを追いかけたとしても、  
苦しみは終わることがない。

その苦しみは、自分自身なのだから。

自分の問題を棚にあげて、  
誰かと一つになれることもありうるのが恋愛であって、  
だから、「本当のこと」を見ないで済んでしまう。

苦しむのは、自分自身から逃げているから。

ぼくは自分と向き合って、  
「そのまま」を愛することからはじめなきゃ、と思う。

そしたらきっと、好きな人を、  
「ただ愛する」ことができるんじゃないかなあ。

愛は、ただ愛するだけ。

うん、それを胸にね。

September 12, 2008



雑誌

出版社: メディアファクトリー; 月刊版 (2008/9/6)

ASIN: B001ETT91W

発売日: 2008/9/6

商品の寸法: 29.2 x 20 x 0.8 cm

**強**さよりも、弱さよりも。

小学生ころ、「強いもの」が好きだった。  
強いものが「かっこいい」と思っていた。

ぼくは、強くあろうとした。  
それは、かっこよくありたいというだった。

マラソン大会で、どうしても3位より上になれなくても、  
絶対勝ってやると思い続けた。

なのに母親は、  
「完走することが大事だよ」  
と、6年間言い続けた。

そのときのぼくは、いつも、  
「わかってるよ」と言いつつも、  
そんなおれの目標じゃないと、心では思ったりした。

中学生になると、  
早くもさらに上には上がいることを思い知った。  
すると、もう強くなろうという気はなくなり、  
ぼくは自然と「弱いもの」を応援するようになった。

たとえば弱いチームがたまに勝つこと。  
そして、強くなろうとすること。  
そういうことがぼくの心をつかんでいった。

だけど、大人になり、  
人と付き合う中で、弱さは弱さでしかないということも知り、  
強くなろうとすることもあれば、弱くてもいいと思うこともあったり。  
と、そんなふうには価値観は日々変わっていった。

いつからか、「ドロー」もあるということもわかった。

人生が長い長い1つの試合なら、  
まだ前半戦も終わっていないことでしょう。

でも、ぼくは自分の命の終わりを知らない。

だからもしかしたら、もうロスタイムかもしれない。

いまはきっと、この話と同じように、  
サッカーで言うなら、0-2くらいで負けている。

これから長い時間で、ドローに持ち込めるか、  
それともロスタイムで、奇跡を起こせるのか、  
それは、自分の生き方次第なのだ。

1点取ろう！

その1点は、心を貫く、支柱になるような1点だ！

あ、いや、もしかしたら、もう1点は取ってるのかもしれない。

大切なものを、大切と言えることは、  
支柱となる1点だ。

残りの時間であと1点。  
追いつけば、それでドロー。

支柱の1点を胸に、  
ぼくはあと1点、必ず取ってみせる。

終わったときには、結果がどうであっても、  
楽しかったかどうかを、自分に問いかけたいな。

あ、そうか！  
やっぱり、「完走すること」なんだ。

母の言葉が何よりも、  
ほんとのことを教えてくれているかもしれない。



単行本（ソフトカバー）：216ページ

出版社: メディアファクトリー (2008/7/16)

言語 日本語

**ISBN-10:** 4840123764

**ISBN-13:** 978-4840123761

発売日：2008/7/16

商品の寸法: 19 x 13 x 1.2 cm

まじめで誠実なのに、恋愛に積極的でない「草食系男子」。さまざまなハードルを乗り越え「きちんと愛し、愛される人間」になるための新しいコミュニケーション学。

浅野におのイラストが気になった。

P S 2の三国志のゲームが好きな友達がいる、  
それにあまり興味がないぼくは、  
そのゲームで唯一気になってることがあった。

馬に乗って戦場へ行き、敵と戦闘をするのだけど、  
弓矢や爆弾なんかで敵は飛んでいくのに、  
馬は何事もないってことだ。

さらに馬から降りて、戦闘をしている間、  
馬はそのへんで草をのんびり食べているのだ。

だから、友達に、

「このゲームで一番強いのは、馬じゃねえ？」

と、言ってみると、「あ、そうだな！」と納得して、笑ったのだった。

草食は平和でいいなあとぼくはのんびり思った。

はたしてぼくは草食なのか、肉食なのか。

見た目は肉食だと思われ。

内面は草食だと思われ。

これって、どうだ。

変じゃね？

たとえば、名探偵コナンは、見た目が子供で、  
頭がきれるから、「なかなかやるな」ってことになるんじゃないか？

逆ならどうだ。

見た目はいかつく、頭は悪い。

そういう感じか、このぼくは。

と思い、軽く凹んでみたものの、  
ま、しかたねーなで終わらせといた。

だれだって、思うようになるわけじゃないさ。  
思うようにならなくても、どうだ、まだ生きてるさ。

すごくね？

戦場で何事もなく草を食ってる馬のイメージ。

そういうものを、ぼくは気にして生きていきますよ。

これからも。

November 21, 2008





単行本: 120ページ

出版社: 小学館 (2001/09)

ISBN-10: 4097272195

ISBN-13: 978-4097272199

発売日: 2001/09

商品の寸法: 18 x 18 x 1.2 cm

思う気持ちは同じなのに、互いの声は届かない…。人々が心に持つ光と影を鋭くみつめ、季節の中で移ろいゆく彼と彼女の心情を、詩情豊かに繊細なタッチで描いたラブストーリー。台湾から世界にヒットした大人向け絵本。

もしも、それがなかったら。

昔から考えていたことなのだけど、  
たとえば、死ぬ直前とか死んだあととかに、  
生きてたころのことを教えてくれないかなって。

たとえば、神様はカメラを持っていて、  
一人一人を映し続けている。

そして、ぼくが誰かと出会ったりする、  
その前に、実は、もっと前にすれ違っていました。  
あんなところで、こんなところで。

そんなようなことを、  
教えてくれないかな。

なんてことを考えたりしてる。

そして、ぼくが右を行ったとき、  
左に行った君が、どこに向かったのかを。

そんなようなことを、  
いつか教えてくれたら、うれしい。

左に行った君の、  
メールアドレスを知らなかったら、  
電話番号をしらなかったら、  
住んでる場所を知らなかったら。

メールがなくなったら、電話がなくなったら、  
住んでる場所に、どうやっても行けなくなってしまったら。

そのまま終わる一生を、ちゃんと愛していけるのか。

ぼくらをつないでる糸は、  
実はものすごく細く、もろい。

だから、近くにいたい、と思う。

帰る場所が、同じだったらいいと思う。

そこにある糸が、  
太く強くあるように。

November 30, 2008



い

文庫: 216ページ

出版社: 新潮社 (2007/06)

ISBN-10: 410129772X

ISBN-13: 978-4101297729

発売日: 2007/06

商品の寸法: 15 x 10.6 x 1 cm

僕は捨て子だ。その証拠に母さんは僕にへその緒を見せてくれない。代わりに卵の殻を見せて、僕を卵で産んだなんて言う。それでも、母さんは誰よりも僕を愛してくれる。「親子」の強く確かな絆を描く表題作。家庭の事情から、二人きりで暮らすことになった異母姉弟。初めて会う二人はぎくしゃくしていたが、やがて心を触れ合わせていく(「7's blood」)。優しい気持ちになれる感動の作品集。

好きだ。

ほんとうはシンプルなことなのに、無理やり難しくしてしまう。

難しくしてしまうけど、伝えたいのは、シンプルな気持ち。

友達とは家族にはなれない。でも、家族にはなれないからこそ、別の深いつながりをつくることのできるのだ。

恋人とは家族になれる可能性を持っている。だけど、夫婦の間に、血のつながりはない。

だからこそ、築ける深い関係性があるのだ。

「愛」とか「恋」とか「情」とかいう、  
そんな言葉で枠をくくるのが楽なときがあるけれど、  
もう、楽じゃなくたっていいや。

それよりもっと確実な、  
それよりもっと本当の、  
気持ちを持っていることを、感じていたいよ。

言葉になくても、ある気持ち。

一番近い言葉にするなら、  
ただ、

「好きだ。」

それでも、まだ足りないけれど。

December 01, 2008



単行本: 268ページ

出版社: 集英社 (2008/6/26)

言語 日本語

**ISBN-10:** 4087712338

**ISBN-13:** 978-4087712339

発売日 : 2008/6/26

商品の寸法: 19 x 13.2 x 2.6 cm

108—それはボールの縫い目、そして煩惱の数。補欠だからこそゆずれない夢がある。映画化原作!注目の大型新人デビュー作。

**合** コンが嫌いだ。

というほど、合コンをしたことないけど、  
そう言いってしまうのは、あんまりいい思いをしてないからだ。

などと毒づく理由は、  
甲子園、合コン、喫煙、飲酒、仲間、家族、恋人、  
青春てんこもりな感じに嫉妬してるからなんだろう。

だって、中学までの自分はそんなふうに、  
高校で全力の青春を謳歌する気まんまんだっから。

まあ、そんな青春を選ばずに、  
それでも自分なりに心にくることをしてきたという自負はあるけのだけど。

前にある人と青春について話したことがって、  
結局、みんな映画やドラマのような青春に憧れていて、  
それに追いつけなくて、それを胸に抱えたまま大人になってるんじゃないかって、  
そんなことを話した。

自分の青春時代に胸を張ってる大人なんて少ないのかもなあ。

じゃなかったら、こんなにも世の中に、青春の物語があふれてるわけがない。  
みんなやりかけの青春をいまも追ってる。

そういう大人は、かわいいね。

輝いていても、輝いていなくても、  
なんかあるんだ、不完全さが。

もろくて、でも確かな不完全さが。

人はいつまでたっても不完全だけど、  
その不完全さに、惹かれあう生き物だ。

その不完全さに、愛が含まれていることを、  
信じておきたいなー。

と思う、不完全なおれであった。

めでたし、めでたし（めでたくない？）。

February 16, 2009



文庫: 159ページ

出版社: 新潮社 (2000/06)

言語 日本語

**ISBN-10:** 4101434212

**ISBN-13:** 978-4101434216

発売日: 2000/06

商品の寸法: 14.6 x 10.6 x 1 cm

一見とつきにくいけど、顔がいいから女の子にモテる。幼稚園から一緒だったという理由で、いろいろな人にミタカくんのことを聞かれたりする私の家に、ミタカは日常的にいつている。うちはママと中学生のミサオ、パパは家出中。だからいつも4人で、ごはんを食べたり、テレビを見たり、日々は平和に過ぎていき、これからも続いていく一ナミコとミタカのつれづれ恋愛小説。

**当**たり前であること、ないこと。

日本語は、たくさんの表現を持っているというのに、  
言いあらわせないことっていうのも、たくさんあるね。

そういや、「星の王子さま」の中で、  
王子さまがキツネと友達になるところがあるけど、  
そのときの関係を表す訳し方が不思議だ。

キツネは王子様に、

「apprivoiser(アプリヴォワゼ)」  
という言葉を使う。

訳し方によって違うのだけど、  
「飼い馴らす」とか「従順する」とか「手なずける」とか、  
そういう言葉のようだ。

人と動物という関係上では、うなずけるのだけど、  
「友達になる」ということとは、違う感じがする。

だけど、そこで語られる、二人の会話の中にはもう、  
言葉を越えた、あるいは、言葉にはない関係というのがわかるわけで、

ああ、言葉がどうしても、確かなものってあることを思い知る。

そんなとき、  
言葉じゃなければ、伝えられる？

色とか、音とか、においとか、

なんというんだろう...

わからないけれど、  
そういう確かなものをつないでいる（いたいと思う）相手が、  
僕にもいるわけだ。

当たり前のように、  
でも当たり前じゃないことを忘れないように。

「恋」とか「友情」とかって言葉に、  
決められないようなものが、  
力になっていることを、知っていたい。

February 18, 2009





単行本: 193ページ

出版社: 筑摩書房 (2010/05)

**ISBN-10:** 4480815090

**ISBN-13:** 978-4480815095

発売日: 2010/05

商品の寸法: 18.8 x 13.2 x 1.4 cm

町には、偶然生まれては消えてゆく無数の詩が溢れている。不合理でナンセンスで真剣で可笑しい、天使的な言葉たちについての考察。

ブルーハーツに衝撃を受けた人は多い。

たとえば、草野マサムネ。

たとえば、穂村弘。

ふたりはその衝撃さのうえ、  
自分がヒロトやマーシーになれないことを思い知る。

思い知ったからこそ、  
マサムネさんは言葉とメロディに磨きをかけ、  
穂村さんは短歌という道を自分の世界にした。

「憧れてもなれないものがあつたとき、  
あきらめないことも必要だけど、  
自分に合った道を突き詰めれば、  
世界を変えることはできるのかもしれないね」

友達とそんな話をしながら、

ぼくもやっぱりヒロトにもマーシーにも、  
マサムネさんにも穂村さんになれないなあと思った。

そんなわけでなれないけど、  
その世界観に引き込まれる穂村さんの「絶叫委員会」。

気がつきそうで、見過ごしてしまってる、  
ちっぽけな世界の「言葉」。  
そんな言葉に違和感と共につっこみを入れる、穂村さん。

美容室で「おかゆいところございませんか」と聞かれたときのどうしようもなさ、  
「何歳に見える？」という会話の爆弾スイッチ感、  
「"2軍"のでいいからTシャツくれ」という子供の会話の淡い光。

穂村さんのフィルターを通すと、  
くだらなさやつまらなさも、一瞬にして世界を変える。

そんなふうに笑わせながらぼくも文章を書くのは憧れなんだけど、  
文章で笑わせるということは、やっぱり難しい。

真似しようとしても、どうしても違ってくるところがある、  
それが自分のオリジナリティなんだと、ある作家さんが言っていた。

違う部分を思い知るほど、自分は研ぎ澄まされていくような気がする。

そんなわけで、  
言葉に対する優しい愛があります、「絶叫委員会」。

ただぼくが穂村さんの言葉のファンなだけだけだね。

August 16, 2010

# 「僕のとてもわがままな奥さん」 銀色夏生



文庫: 170ページ

出版社: 幻冬舎 (2010/04)

**ISBN-10:** 4344414551

**ISBN-13:** 978-4344414556

発売日: 2010/04

商品の寸法: 15.2 x 10.2 x 1.8 cm

きれいな奥さん。なんでも上手にこなす素敵な奥さん。幸せなご主人。こんなパツとしないご主人にどうしてあんなに美人の奥さんが?...でも違います。誰にも言えませんが、僕の毎日は、ちょっと地獄なのです。とてもきれいでわがままな奥さんナオミと結婚したジュン。二人が繰り広げる愛と涙の日々を綴る、笑えてほんのり温かい長篇小説。

**ぼ**くが恋愛で学んだことなんてたかがしれているのだけれど、ひとつの答えは見つけた。

それは、人は人がよくわからないけれど、だから好きになるし、必要になるということだ。

そう思うと、どんなふうな愛が正しいとかって、あんまり意味のないことだと知る。

意味がないから、正しいと思う愛を、幸せな愛に変換する。

人はたぶん、信じてるものを、幸せに変えたいのだ、きっと。

で、銀色夏生の「僕のとてもわがままな奥さん」。

ここには、ぼくが信じた愛はあまりありません。  
でも、気持ちは理解できる。

とても美人だけれど、とてもわがままで、  
突拍子のないことを急に始めたり、  
愛してるかどうかもわからない言動を繰り返す、奥さん。  
それにふりまわされて、いつか別れてやると思いながらも、  
いいようにてのひらで転がされて、やっぱり別れられないダンナ。

簡単にいうとそんな話か。

よくある草食系男子の感じでもあるんだけど、  
たとえば「ソラニン」のような男が描くそれとは違って、  
ああ、なんか女性が思う振りしたい男って感じだなと思う。  
感覚的には「海がきこえる」っぽいとも思うのだけど、  
「海がきこえる」にあるリアルさと若さが無いから、  
やっぱりどこかただの「変態」的なものに思えてしまう。

それでもこうやってなんとなく心に残るのは、  
おかしいよと言われても、突き抜けた愛がそこにあるからなんだろうな。

遠巻きに見てるのはいいけど、  
関わると大変な愛ではあるけどね。

つまりね、やっぱり、  
男女関係ってのは当人どうしにしかわからないわけです。

だって築いちゃうんだもん、どんなふうになっても。

ああ、やっぱりわからない。

でも、墜ちてる、恋に、愛に。  
いや、きみというものそのものに。

この話、嫌。  
でも、興味はある。

そう思わせた銀色さんの勝ちだね、さすが。

August 17, 2010



ハードカバー: 272ページ

出版社: 祥伝社 (2008/5/10)

言語 日本語

**ISBN-10:** 4396632975

**ISBN-13:** 978-4396632977

発売日: 2008/5/10

商品の寸法: 19 x 12.4 x 3 cm

恋愛アンソロジー「I LOVE YOU」などで読書界を騒然とさせた話題の大型新人、初めての恋愛小説集。

人間レベルなんて。

人は誰もが自分が主役のストーリーを生きている。  
それなら、誰かの物語に参加するときは、  
いつも脇役なのかもしれない。

「百瀬、こっちを向いて。」

自分の物語に参加できないで、  
主役を引き立たせるために、脇役を演じ続けているような、  
そんな主人公たちの短編集だ。

秘密、後悔、コンプレックス。

誰かと比べるからいつも苦しい。  
苦しいのを知ってるから、心を公開する範囲を限定する。  
いつだって傷つくのを最小限に押さえるために。

順調になんか成長できないから、  
そういう時代も少なからずあったんだと気が付く。

今だって、ただやりすぎしかたを見つけただけで、  
本当に解決できたかと言えばわからない。

でもさあ、人は人に傷つくなら、  
人は人に救われることもあるんだよね。

信じることは、  
信じてくれた経験が後押しをしてくれて、  
世界をやさしくしてくれるんだよね。

憧れはたくさんあっても、  
誰の憧れでもない自分の人間レベルが2だとしても、  
触れたい世界のために、心は叫ぶんだ、きっと。

「百瀬、こっちを向いて」、と。

August 18, 2010



単行本: 176ページ

出版社: 文藝春秋 (2005/10/25)

**ISBN-10:** 4163675507

**ISBN-13:** 978-4163675503

発売日: 2005/10/25

商品の寸法: 18.4 x 13.6 x 1.8 cm

「サラダ記念日」「とれたての短歌です。」「もうひとつの恋」「かぜのてのひら」「チョコレート革命」の5歌集1400首あまりのなかから、394首を著者自身が精選。あなたの好きなあの歌も、きっとここにある。

**正**しいルールは知らないけど。

短歌は五七五七七だよな。  
でもどこで区切るのかわからないくらい、  
ぐちゃぐちゃしてるのもある。

案外なんでもいいのかなあとか思う。

基本を知ってるから、崩してもいいということか。

たとえば野茂の投球フォームのように、  
基本を覚えた上で、スピードを追求した結果、  
あの投げ方（トルネード投法）になったように。

野茂のフォームをはじめて見たときは、度肝を抜かれた。

見たことのないフォームにワクワクした。  
短歌にいそしんでいる人は、そういう感じなのだろうか。

でも、五七五七七のリズムがしっかりしてるほうが、  
ぼくには心地よく聞こえる。

その心地よさはどこにあるのか。  
リズムだけを考えれば、五七五七五にしたほうが、  
歯切れがいい気がする。

でも、「七」の歯切れよくない感じが、繊細さを生んでいる。  
たとえそれが言い切っている歌でも、  
「五」ではなく「七」のおかげで、  
はかない余韻を残している感じだ。

そんなことは、みんなわかってるかもしれないけど。

サラダ、チョコレート、バニラ、マクドナルド、  
パスポート、ブレザー、シャンプー、プールサイド。

どんなに横文字にあふれても、  
「七」に隠れた侘しさを感じる時、  
ああ、やっぱり日本人だなあと思ったりする。

というわけで、ぼくも一首歌ってみます。

「優しさをわけてくれよ」という君のわけてくれたポテトのにおい

と言った後に、「俵万智」と付け足したら、それっぽく聞こえるかなー。

August 20, 2010





文庫: 140ページ

出版社: 新潮社 (1977/05)

言語 日本語

**ISBN-10:** 4102159010

**ISBN-13:** 978-4102159019

発売日: 1977/05

商品の寸法: 15.2 x 10.6 x 1 cm

**た**だ、楽しいということにトリツカレル。

いしいしんじの「トリツカレ男」を読んだ時にも思ったけれど、男って、孤独だと思う。

状況的に孤独かどうかの話じゃない。  
本能的に孤独だ。

おそらくだけれど、  
愛する人や子供がいたとして、  
幸せにあふれたとしても、  
本能的な孤独はずっとある気がする。

人は女として生まれる。  
でもお腹の中で、男性ホルモンを浴びると、男になる。  
男は、女として生まれ損ねた人間なのだ。

男は劣等感を持っている。  
だからプライドが傷つくと弱る。

弱いからよく吠える犬。  
簡単にいえばそんなもんだ、男なんて。  
褒められたくてしかたないのに、  
尻尾を隠して、気が付かれないようにしている、  
それが男のプライドだ。

だから、「ただ楽しい」ということ、  
それに「トリツカレル」ことで、  
孤独を癒そうとしているのだ。

カモメのジョナサンは、生活のために「飛ぶ」ことに興味がない。  
ただ、「飛ぶ」ことが楽しい、だから飛ぶ。  
飛ぶことを追求することが、ジョナサンにとっての「生きること」なのだ。

たぶん、どんな男もそうなのではないだろうか。  
「幸せ」とは別の、孤独を癒す力を欲しがっている。  
それは自分が自分であるためのしるし、  
ジョナサンでいうところの「飛ぶ」という行為が、  
心にどうしても必要なのだ。

いまだって、ぼくの心は痛いほど叫んでる。

飛べ、飛べ！と。

August 27, 2010



単行本: 187ページ

出版社: 新潮社 (2009/12/19)

**ISBN-10:** 4103213213

**ISBN-13:** 978-4103213215

発売日: 2009/12/19

商品の寸法: 19.4 x 13.8 x 2.4 cm

こんなサッカー人生、ホントにアリ!?完全無名選手が突如プロデビュー、快速フォワードとして一躍脚光を浴び、プロ1年目、日本代表にも召集された。そして日本をW杯に導く歴史的ゴールを決める!衝撃の高校生活も初告白。浦和、神戸、香港、鳥取...野人はいつも全力疾走。

「ルーキーズ」も「スラムダンク」も「メジャー」も比じゃない。

サッカーを見ない人でも、  
どこかで「野人」あるいは「岡野」という呼称を耳にしたことがあるのではないか。

彼は日本が初めてのW杯出場を賭けた試合で、  
出場を決めるゴールを決めた選手である。

そして、2008年まで浦和レッズに所属し、  
現在はガイナレ鳥取というクラブでプレーしている。

ぼくが浦和レッズが好きなのは、  
埼玉で生まれ育ったからだけじゃない。

岡野雅行がいたからだ。

ひたすらにがむしゃらに、  
時にはボールよりも早く走るそのプレーに魅了された。

そんな彼の自伝。

はっきりいって、映画化希望だ。

中学卒業時、ブラジル留学を希望するも、  
なぜか島根の学校に留学。  
しかし、その学校にはサッカー部が存在しない。  
サッカー部を作るが、部員はサッカー未経験。  
しかも全国から選りすぐりのヤンキーばかり。  
最初の試合は乱闘で「不戦勝」。  
なんとか試合になったが、0-18で負ける。  
それでもあきらめずサッカーに打ち込み、  
3年生の最後の大会では県決勝にまで駒を進める。  
が、PK戦になった最後は、岡野自身が外してしまい、優勝を逃す。  
岡野とともに戦ったヤンキーたちは、岡野に言葉をかける。  
「岡野がいなかったら、おれたちはサッカーやってなかったし、  
こんな楽しい思いはできなかった」  
「岡野がPKを外してくれてよかったよ。おれらは外せない。  
おれらが外して最後だったら誰も納得できない。それ、やばいだろ」  
その言葉に岡野は号泣する……

って、どうですか、「スクールウォーズ」にだって負けてないでしょ。

さらには、大学時代は寝起きでバッシュで100m走をして、  
10秒8というタイムを叩きだし、初めて自分が足が速いことに気がつき、  
寮で飼ってた犬に追われて逃げたら、犬を振りきってたり、  
試合があることを忘れて二日酔いのまま試合に出たら、  
なぜかハットトリックを達成。  
たまたま相手校の選手を見にきていたスカウトの目に止まり、  
浦和レッズに入団することになる。

レッズに入って怪我をして、全治3ヶ月と言われたのがなぜか3日で治ってしまう。  
ついには日本代表にまで上り詰め、  
それまで最終予選に出場機会がなかったにもかかわらず、  
たった1試合でW杯出場を決めるゴールを決めてしまう。

こんなの、ありますか？

レッズの試合でも、岡野がピッチに入ると、何かが起こった。  
本当に不思議な力を持った選手なのだ。

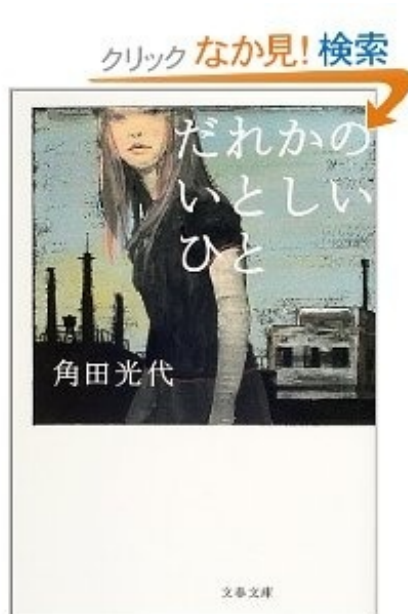
好きにならずにはいられないでしょ。

岡野は今も走っています。

彼が走る限り、ワクワクは終わらない。  
その度にぼくはドキドキして泣くのです。

あー、映画化してほしい、ほんとに。

August 30, 2010



文庫: 228ページ

出版社: 文藝春秋 (2004/05)

**ISBN-10:** 4167672022

**ISBN-13:** 978-4167672027

発売日: 2004/05

商品の寸法: 15.2 x 10.6 x 1.2 cm

転校生じゃないからという理由でふられた女子高生、元カレのアパートに忍び込むフリーライター、親友の恋人とひそかにつきあう病癖のある女の子、誕生日休暇を一人ハワイで過ごすハメになったOL…。どこか不安定で仕事にも恋に対しても不器用な主人公たち。ちょっぴり不幸な男女の恋愛を描いた短篇小説集。

**完** 壁なキスに胸が痛む。

「好き」という気持ちがわからない、  
という気持ちがよくわからない。

ああ、そういえばおれさ、  
好きになったら、言葉にしてしまうのさ。

言葉にすることによって、どんどん好きな気持ちは固まっていく。  
だから、好きな気持ちを疑ったことなんて、ほとんどない。

でもね、もしかしたらそれは錯覚なのかもしれないね。  
言葉が気持ちを作っていくのかも。

好きな気持ちに迷いはないとしても、

相手は「だれか」を思うのだろう。

「だれか」を思うとき、それを確かめている。  
ほんとうは愛してないということを。  
好きという気持ちが、わからなくなりながら。

角田光代、「だれかのいとしいひと」

恋愛、友情、幸、不幸...  
どの枠にあるのか曖昧なまま、  
仕事にも恋にも不安定な日々を過ごす、男女の短編集。

どの主人公も、自分の問題を劇的に解決することはできない。  
でも、「そうなのかもしれない」という想いを知る。

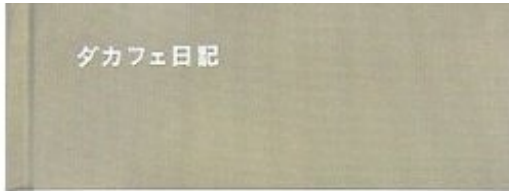
それは喜びでも悲しみでもなく、  
ただ、横たわるように。

人を好きになればなるほど、わからなくなることが多くなる。  
たぶんそれは、いとしいひとのほとんどは、  
「だれかのいとしいひと」だからだ。

だから、世界はちょっとずつ、  
輝いて見えるんだろう。

完璧なキスに想いを馳せるときの、  
「だれかのいとしいひと」という響きは、  
美しすぎてしまうのだった。

August 31, 2010



しあわせて、きつこういうこと。



ダ  
カ  
フェ  
日  
記  
撮影  
森  
友  
治

夫婦ふたり、子供ふたりと犬いっぴき。どこにでもいそうな、ある家族の日常。何気ないけれどうれしくて、楽しくて、美しい。そんな瞬間を父親のカメラは写し出す。『日本ブログ大賞2006』写真大賞受賞。1日3万アクセスの大人気ブログが写真集になりました。

発行：ホーム社 発行：(集英社) 主編：216枚 (定価2200円)

単行本: 224ページ

出版社: ホーム社 (2007/7/5)

言語 日本語

ISBN-10: 4834251373

ISBN-13: 978-4834251371

発売日: 2007/7/5

商品の寸法: 20 x 15.4 x 2.6 cm

夫婦ふたり、子供ふたりと犬いっぴき。どこにでもいそうな、ある家族の日常。何気ないけれどうれしくて、楽しくて、美しい。そんな瞬間を父親のカメラは写し出す。『日本ブログ大賞2006』写真大賞受賞。1日3万アクセスの大人気ブログが写真集になりました。

**む** かしむかしあるところに、23才の男の子がいました。

その男の子は、3年間付き合った女の子と別れてからというもの、カラフルだった世界の色がモノクロに見えるようになりました。

モノクロの世界では、なにもかも、輝くことはありません。一日一日がとてつもなく長い闇のように思えて、自分が生きてるということを忘れそうになりました。

死のうとは思いませんでしたが、生きてなくてもいいと思う日々が流れていきました。

そんなある日、男の子は、もうすぐ27才になる女の子と出逢いました。



男の子はその女の子が気になって、少しずつ話すようになりました。  
女の子には彼氏がいましたが、男の子はすぐにその女の子と話すことが好きになりました。  
女の子もその男の子と話すのが、彼氏と話すのとは違う気持ちで好きになりました。

それからふたりはいろいろな話をしました。  
女の子が好きだという「ダカフェ日記」という本の話。  
「こんな家族になりたいんだ」という言葉を、  
男の子は一瞬プロポーズかと思ってしまいました。  
「うん、こんな家族、あなたとだったら作れるかもね」  
男の子はそんなふうに言ってみました。  
女の子は少し、照れていました。

男の子は女の子を好きになりました。  
でも、女の子は彼氏と結婚することにしたのです。

「君といたら、すごく幸せになれると思う。ダカフェ日記みたいに。  
でも、私には彼が必要なんだ。ごめんね……」

男の子はそのときわかりました。  
愛とは「必要」という言葉なのだと。

女の子は、少しずつ、幸せになりました。  
男の子は、それを見ているのが好きでした。  
女の子の生活が、ダカフェ日記みたいに、  
やさしいぬくもりであふれていたからです。

男の子はふと気がつきました。

世界に色が付いている。

それは女の子と出会ったからだ、男の子は思いました。

それからもう、男の子の世界がモノクロになることはありませんでした。  
たとえ女の子の声が聞けなくても、  
ダカフェ日記を開けば、そこから女の子の声が聞こえてくるからです。

「なんだか幸せだなあ」

キラキラと光る、優しい声が。



単行本: 143ページ

出版社: 幻冬舎 (2010/08)

ISBN-10: 4344018761

ISBN-13: 978-4344018761

発売日: 2010/08

商品の寸法: 20.8 x 14.6 x 1.8 cm

**嫌**い、というのは。

- 1.最初から嫌い
- 2.最初は好きだったけど、今は嫌い
- 3.好きだけど、こういうところは嫌い

人にはどうしても嫌いになってしまう相手がいる。  
それは仕方ないとしても、嫌いでいることは疲れる。  
だからできれば遠ざけたい。

その相手を嫌いになったのはどういうわけがあるだろう。  
1なら、もしかしたらその相手を嫌いだと決めつけたのかもしれない。  
3なら、嫌いな部分を伝えてないだけなのかもしれない。

2なら、どうだろう。

好きだったものが、嫌いになる。

それはきっと、直接的に大きな間違いを犯したわけではないはずだ。  
だけどもある日突然、嫌いだということがわかってしまう。

それには何かのきっかけがあるけれど、  
そのきっかけはきっかけにすぎない。

きっと、「嫌いの素」が、少しずつ積み重なっていることを放置したのだ。  
気がついたときには、とんでもなく大きな塊が出来上がっている。  
その向こうにあった「好き」の部分はもう見えない。

その人はもう、「嫌い」でしかなくなる。

好きなものが、嫌いになる。

嫌いになるには、マイナスの出来事が必ずある。  
一度嫌いになったら、元にあった「好き」を取り戻すのは難しい。

たぶん、はじめから嫌いな人よりも、  
嫌いな部分が気になる人よりも、  
その根は深く埋まることになる。

もし、そこに愛があるならばきっと、  
愛さないことが、唯一の愛なのかもしれない。

と、少し悲しいことを、考えていた。

September 20, 2010



単行本: 304ページ

出版社: 集英社 (2006/3/24)

言語 日本語

**ISBN-10:** 4087748030

**ISBN-13:** 978-4087748031

発売日: 2006/3/24

商品の寸法: 19.4 x 13.8 x 2 cm

八年後に小惑星が衝突し、地球は滅亡する。そう予告されてから五年が過ぎた頃。当初は絶望からパニックに陥った世界も、いまや平穏な小康状態にある。仙台北部の団地「ヒルズタウン」の住民たちも同様だった。彼らは余命三年という時間の中で人生を見つめ直す。家族の再生、新しい生命への希望、過去の恩讐。はたして終末を前にした人間にとっての幸福とは?今日を生きることの意味を知る物語。

月が綺麗だ。

雨はまだ、遠くにある。

時折、雲がかかって、朧月になる。

雲が流れて、また綺麗に光り、  
雲がかかって、また、月を隠す。

それを繰り返すしぐさが、美しい。

ひらひらと風に吹かれるスカートで、

素足がふっとあらわになるときの、美しさみたいに。

そんなことをぼんやり考えていられる日は、いい。

でももし、明日、世界が終わるなら、  
どうやって、人生最後の月を眺めよう。

地球衝突が避けられない小惑星が8年後に地球に落ちてくる。  
それは世界の終わりを意味した。  
終わりへのカウントダウンの中、  
人は何を信じ、何を選んで、終わりを迎えるのか。

ぼくは家族が好きだけれど、すべてではない。  
だけど、きっと親なら、自分の築いた家族がすべてと思うのだろう。

「ゆず～ゆず～」  
と、もうすぐ1才になる息子の名を呼んであやす、親友の声を聞いているとき、  
ぼくはそれを確信した。

たぶん、彼は、  
ぼくよりも世界の終わりが悲しいに違いない。

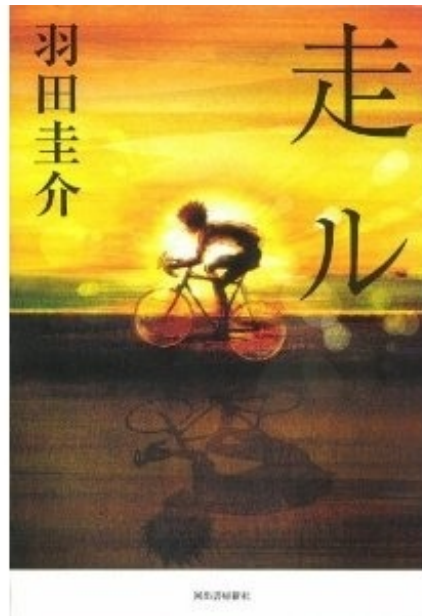
そういう悲しみを持って死ぬるといのは、  
幸福のうちのひとつかもしれない、と思う。

明日で世界が終わるとしても、  
ぼくがスペシャルと思う人のそばには、いることはできない。

だから終わるな、世界。

たとえ雨でも明日も照らせ、  
この幸せな悲しみであふれた地球を。

これが最後にはならないようにと、  
雨が降る前の月に、見とれていた。



単行本: 156ページ

出版社: 河出書房新社 (2008/3/14)

**ISBN-10:** 4309018580

**ISBN-13:** 978-4309018584

発売日: 2008/3/14

商品の寸法: 19.2 x 13.6 x 2.2 cm

物置で発掘した緑のピアンキ。その自転車で学校に行った僕は、そのまま授業をさぼって北へと走るが……。 「21世紀日本版『オン・ザ・ロード』」(読売新聞)と評された、文藝賞作家の青春小説!

あれは、18のときか。  
当時ぼくは、早稲田大学の学食でアルバイトをしていた。  
そこで友達になった、早稲田の学生と、  
自転車で房総半島を一周しようと計画を立てた。

ロードバイクではない。  
ママチャリとは言わないけれど、  
ただの一般的な自転車で、だ。

しかも真冬だった気がする。

吹きさらしの北風の中、  
寝袋を持ったぼくらは、ただペダルを漕ぎつづけた。

房総半島を一周するつもりが、  
内房の富津にある鋸山でタイヤがパンクし、  
そこでぼくらは気力がなえた。

さすが「のこぎりやま」だ。

そこから、横須賀行きフェリーに乗り、  
そしてまた早稲田まで走った。

昼間の公園で寝たり、  
深夜のファミレスで、ドリンクバーだけで粘ったり、  
温泉を見つけて入ったり、轆かれかけて焦ったり。

でもそれはまるで一瞬で、  
ほとんどの時間をただ、走っていた。  
くだらないことで、笑ったり、口論したりしながら。

ただ、それだけの時間。

この小説を読んでいたら、そんなことを思い出した。  
結局、北海道には行けなかったように、  
ぼくも、房総半島一周はできなかったが、  
たぶん、それを達成することが目的ではなかったのだと思う。

思ったことをやってみた。

たぶん、それだけ。

そういうのが、男子にとっては大切なのだと、思う。

あ、そうか。

「水曜どうでしょう」がおもしろいのって、  
ただそれだけだからなのかも。

ぼくらの旅もビデオでも回しておけば、  
面白い映像が今でも見れたのかもしれない。



文庫: 151ページ

出版社: メディアファクトリー (2010/10/25)

言語 日本語

**ISBN-10:** 484013572X

**ISBN-13:** 978-4840135726

発売日: 2010/10/25

商品の寸法: 14.8 x 10.6 x 1.4 cm

嫌いな鯖を克服しようがんばったり、走るのが苦手なのに駅伝大会に出場したり、生徒に結婚の心配をされたり、鍵をなくしてあたふたしたり…。"瀬尾先生"の奮闘する日常が綴られるほのぼのエッセイ。学校というルールの厳しい社会の中で、いろいろな生徒がそれぞれに頑張っている姿を見て、自らも発奮し成長しようとする瀬尾さん。それは彼女が描く小説世界につながっている。

**修** 学旅行の作文。date.1994



京都の人は優しいと感じた。多分それは、そこが観光地であるから、慣れていることもあるかもしれないが、その優しさは持って生まれた土地柄じゃないかなと思った。そんな優しさを僕も持ち続けて生きたいと思う。京都の人はそれが当たり前のように僕らに接してくれる。他の土地へ行く時はその名所や遺産を人は見たがるけれどそれを見て感動するよりも、その土地の人と接して感動した方が、なんていうか、そこに来たっていう感じが、よりいっそう強まると思う。決して京都に移ってきた人がすぐ、その土地の色に染まることは出来ないと思う。ゆっくり時間をかけてだんだんと濃くなっていくに違いないと思う。そういうふうを考えていくと、僕も春日部という土地に長くいるから、もう色はあせないほど染まっていると思う。ということは、こんな自分にもこの地のいい色があるのかなと思った。でも自分自身まだその色ははっきりみえていない。だからって、この地にいい色がないとは思わない。確かに名所とか名物とか有名なものはあまりないけれど、絶対に、いつかいい色が見つかると思うし、そう思いたい。今まで旅行に行ってそう感じたことはそうなかった。やっぱり京都という土地で自分が班のリーダーとなって行動してきた結果が、自分の思っていたことを変えたのかもしれない。よく、いい人だとか使っているけれど、本当にいい人っていうのは自分にもものを持っている人だと思った。しかもいい方で。だから僕は、京都の人と接して、自分の中に、優しさというものの足りないのだと思った。今まで、他人に優しいと言われたことは、他人が決めるのだから自分はそれで満足してはいけないのだと思う。京都の人が、当たり前のように優しく接してくれるけれど、それは僕が決めたことで、京都の人は、そう思っていないのかもしれない。だから、僕は自分では気付かないことを、他人は見ているのだと思う。京都の人に気づかなかった優しさを気付かせてくれて、今、感謝したいと、心の中で想っている。

中学生の毎日は、嵐の中にいるようなもので、大人になった今からまたあの毎日をやれと言われても、きつついていけない。

嫌いなことでもやらなきゃいけないし、理不尽なこと、人間関係の悩み、思春期は想像以上にヘビーだ。

瀬尾まいこさんは、中学校の先生でもあるので、そんなヘビーな年代の生徒と常に接している。

そして、そんなヘビーな中学生が見せる優しさを、ひたすらに照らし続ける。

それは大それたものではなく、優しさの本質みたいな一部分。

子供にとって大切な大人は、自分をちゃんと見てくれている大人。

瀬尾さんは、生徒の優しさをちゃんと見つけ、それを自分の心の糧にしている気がする。そういう先生は、安心して心を委ねていい「大人」だと、ぼくが中学生なら、思うだろう。

ちょっとした優しさを、ちゃんと見つけられる、その心がもう、優しい。

大人になったぼくは、たいして優しくはないけれど、優しさをちゃんと見つけられる、感じられる心を持ちたいと思ったりする。

少しでも、優しくなるように。

そういえば、ぼくの親友は京都出身なのだけど、わかりやすく優しい男ではない。

そいつに比べればまだぼくの優しさは分かりやすいが、そいつが優しいことをぼくは知っている。

同い年のそいつと、もしかしたら、  
修学旅行のとき、遭遇していた可能性もあるな、とふと考えた。

で、もしそう聞いてみても、  
「そのとき会っていても、友達にはなっていないかもな」  
と、彼は言うような気がする。

そしたらぼくは言ってやるんだ。

「おまえは、北海道に行ったから優しくなったんだな」と。

14才のぼくらなら、きっと絶えず喧嘩したろう。  
それもそれで面白いと思うけれど、  
やっぱり嵐の中では耐えられないかもなとも思う。

会うべき人とは、会うべき場所で会うのだ、きっと。

お互いにゆかりのなかった北海道で、  
彼と出会えたことを、ぼくは感謝している。

December 06, 2010

## 「All Small Things」 角田光代

---



単行本（ソフトカバー）：128ページ

出版社：講談社 (2004/2/5)

言語 日本語

**ISBN-10:** 4062122642

**ISBN-13:** 978-4062122641

発売日：2004/2/5

商品の寸法: 18.8 x 13.2 x 1.6 cm

片思いの人との散歩、中学生のときの帰り道、あのときに手をつなげたこと、つなげなかったこと...角田光代がつむぎだす12人の恋模様。

「今までで、どんなデートが印象に残ってる？」  
代わる代わるの主人公たちが、それを語り繋げていく物語。

恋が成就した瞬間を、その恋の頂点とするならば、  
それから下っていくことは、悲しみにしか思えなかったときがある。

それが、若さだと今は思う。

ということを思ったのだから、ぼくは若くはない。  
それは悪い意味ではなく、下っていく中にある輝きを、  
今ならたぶん、見つけ出せる思考になったと感じるのだ。

All Small Things。  
ちいさなしあわせ。

頂上から見た景色は、あまりにも美しくて、  
いつまでもそこに立っていたいと思う。  
けれど、そこに立ち続けていると、

薄い空気にいつしか倒れてしまったりする。

もう一度見たくなかったなら、  
下ってまた登っていくことだ。

その下り坂の途中、あるいは休憩しているさなか、  
その中に、見つけられる幸せがある。

ドラマチックでもなんでもない、  
他の人には何がいいのかさっぱりわからない、そのこと。  
それこそ、実は幸せの大部分を握っているような気がする。

あったものが、なくなることは淋しい。

けれど、なくなったわけではなく、  
形を変えたのだと思えたなら、  
そこに、これからの「All Small Things」を見つけるのだろう。

September 29, 2011



文庫: 298ページ

出版社: 中央公論新社 (2006/09)

**ISBN-10:** 4122047080

**ISBN-13:** 978-4122047082

発売日: 2006/09

商品の寸法: 15 x 10.6 x 1.6 cm

薫里は33歳のフリーライター。仕事は順調で、妻子ある年上の恋人ともうまくいっている。年下の圭ちゃんは新鮮な喜びをくれる存在。同時に動きはじめた二つの恋はどこへ向かうのだろうか…。しなやかな意志をもち、自然体でいきる女性を描いた著者初の長編小説。深遠な感情、ささやかな発見、一瞬の風景を、随所に織りこんだ短歌が鮮烈に伝える、現代の“うた物語”。

全然、スッキリしない。

途中から、このどうしようもない、モヤモヤをどうにかしてくれと、祈りにも似た想いで、読み続けたというのに、何も浄化されない。

勝手だ。

その中に俺も含まれているけれど、人はみんな勝手だ。

どうしようもなく。

この感じは瀬尾まいこさんの「[図書館の神様](#)」の、不倫相手との描写を読んだときの感じだ。でも、「[図書館の神様](#)」には、高校生の垣内君という存在がいて、彼がそのもやもやを吹き飛ばしてくれる。

でも、この話の中には、勝手な大人しか出てこずに、

それぞれが勝手な想いを、吐露する。

それは、誰もが誠実で、誰もが不誠実であるということなんだけど。  
そんなことは、わかってる。  
それが、普通の世界だからだ。

この話に出てくる、どの関係性を切り取っても、好感が全く持てない。

そのわけは3つある。

- 1つ、まるで自分のダメな部分と重なること。
- 2つ、主人公の惹かれる男のタイプが嫌いなこと。
- 3つめ、そして何より、垣内君のような、現実世界からしたら「異端」な優しさを持つ人が登場しないこと。

登場しないからこそ、リアルで、  
リアルだからこそ、俺の気持ちを救ってくれない。

ずるくて、勝手に、自分の意思とは違うところで、傷ついたり、傷つけたりしてる。  
そんな風にしか生きられなくても、別にいいよ。

恋愛なんて、そんなもんだもん。

だからこそ、このもやもやを救ってくれる言葉を読みたかった。

久しぶりに、読んで「墮ちる」話を、読んでしまった.....

これもまた、人生のスパイスだ。

そういうことにしておく。

November 11, 2011



単行本: 463ページ

出版社: 幻冬舎 (2011/12/6)

**ISBN-10:** 4344008677

**ISBN-13:** 978-4344008670

発売日: 2011/12/6

商品の寸法: 20.6 x 14.8 x 3.2 cm

読書が好きという人はたくさんいて、  
毎日読んだり、年間百冊以上も読む人もたくさんいる。

そういう人からすると、  
ぼくは読書好きというレベルではないかもしれない。

ただ、ぼくは瀬尾まいこさんの文章が好きなのだ。

他にも様々な作家の文章を読むし、  
面白いと思う物語には、たくさん出会っている。

それでも瀬尾さんの文章が、圧倒的に好き。

瀬尾さんの、どの作品を読んでも、そう思う。

唯一無二に、好きなのだ。

その理由を、セリフの中に見つけた。

単行本になると思うので、  
全部書くのはやめておく。

要約すると「いろんなことを平気にしてくれる」ということ。

読んでみると、そういう気持ちになっていることに気が付く。

今回の連載では主人公の男の子が、高校生から大学生、社会人と成長していく。その中でいくつかの恋愛を経て、結婚に至るのだけど、ラブストーリーではないとぼくは感じる。

そういえば、瀬尾さんの作品の中で、ベタベタな恋愛小説というのではないと思う。

好きとか嫌いとか、愛とか恋とか、そういう表面的な感情や状態を描いたりしない。

瀬尾さんの文章には登場人物の「心の根」が見える。それは、愛とか恋とかの、もっと奥にあるもの。

もっと奥にあるものを、難しくしないで、物語に乗せる。

それが「いろんなことを平気にしてくれる」のだ。

ぼくも、大切な人の「いろんなことを平気にしてくれる」存在になればと思う。

「会いたい人」とか「楽しい人」とかではなく、そういう存在になるべきなのだ。

瀬尾さんの文章は、いつも自分に足りないものを気が付かせてくれる。

この連載小説は、間違いなく、ぼくの中では最高傑作。

単行本になるのが待ち遠しい。

そして、全4回のタイトルが秀逸だなあと思う。

第1章 米袋が明日を開く  
第2章 水をためれば何かがわかる  
第3章 僕が破れるいくつかのこと  
最終章 僕らのごはんは明日で待ってる

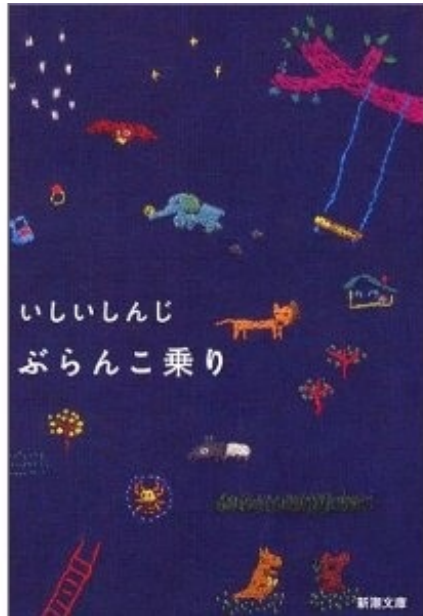
本タイトルは、何になるんだろうなあ。

December 21, 2011



## 「ぶらんこ乗り」 いしいしんじ

---



文庫: 269ページ

出版社: 新潮社 (2004/07)

言語 日本語

**ISBN-10:** 4101069212

**ISBN-13:** 978-4101069210

発売日: 2004/07

商品の寸法: 15.2 x 10.6 x 1 cm

ぶらんこが上手で、指を鳴らすのが得意な男の子。声を失い、でも動物と話ができる、つくり話の天才。もういない、わたしの弟。一天使みたいだった少年が、この世につかまろうと必死でのぼっていた小さな手。残された古いノートには、痛いほどの真実が記されていた。ある雪の日、わたしの耳に、懐かしい音が響いて…。物語作家いしいしんじの誕生を告げる奇跡的に愛おしい第一長篇。

いつかはやってみたいなあと思いつつ、  
まだやってないことがあった。

それは「お風呂で本を読む」ことだ。

いざ、やろうとしてみても、  
やっぱり本が濡れるしなあとか考えて、  
結局ずるずると今日まで来たわけだ。

そんな日々を経て、  
生涯初の風呂読書の相手に選ばれたのは、  
いしいしんじ「ぶらんこ乗り」だ。

いしいしんじの作品は、お風呂で読んだら絶対いい。

という確信がぼくにはあった。

それは、いしいしんじの書く物語は、  
いつもどこか夢の中のようにあって、  
それでいて、現実がどこかに隠されているからだ。

その描写が絶妙で、お風呂に浸かりながら読んだなら、  
湯船の心地よさとともに、夢とうつつを行ったりきたり。

この「行ったり来たり」が、ぶらんこの揺れ方だ。

声を失った弟のノートに残されていた作り話と、  
そこにある「ほんとうのこと」に「ふるえる」姉の、私。

童話のようにはじまながら、  
いつのまにか切ない物語が進み、  
詩のように、心が綴られていく。

「ほんとうのこと」は、とても怖いことだけど、  
手を伸ばして繋がってみることに、意味はある。

たとえば、今はもう会わない人は、あっち側にいて、  
「ほんとうのこと」に時々手を伸ばしているなら、  
それは、こっち側のことを、気にして過ごしているということ、  
でもあるかもしれない。

「お互いに命がけで手をつなげるのは、ほかでもない、すてきなこととおもうんだよ」

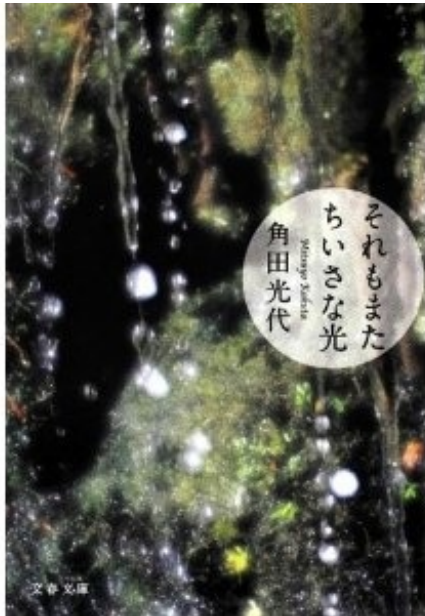
やっぱり、いしいしんじの物語には愛があふれている。

あのとき、君も、そう思っただろうか。  
今は、その想いのカタチは、君を幸せにしているだろうか。

お風呂場の天井に目をやる。  
ぽたりと水滴が肩に落ち、ぴくっとなる。

少しばかりのぼせながら、  
またひとつ、大切なものがわかった気がした。

June 11, 2012



文庫: 207ページ

出版社: 文藝春秋 (2012/5/10)

言語 日本語

**ISBN-10:** 4167672081

**ISBN-13:** 978-4167672089

発売日: 2012/5/10

商品の寸法: 15.2 x 10.6 x 1.4 cm

デザイン会社に勤める悠木仁絵は35歳独身。いまの生活に不満はないが、結婚しないまま一人で歳をとっていくのか悩みはじめていた。そんな彼女に思いを寄せる幼馴染の駒場雄大。だが仁絵には雄大と宙ぶらりんな関係のまま恋愛に踏み込めない理由があった。二人の関係はわかるのか。人生の岐路にたつ大人たちのラブストーリー。

普通のガールズトークみたいな話だなあ。

と、思ってみたものの、  
男子である僕は、本物のガールズトークを知っているわけじゃない。  
なのであくまで、どこかで耳にしたり目にしたりする、  
女同士の話に思えた、というわけで。

恋とはちょっと違う幼馴染みとの関係、  
不倫や、ダメメンにはまる女友達、  
仕事をしながら、普通の生活に添えるように、  
流れてくるラジオの声。

それはやっぱり、  
どこにでも落ちていそうな、ガールズトーク。  
それも、二十代のキャピキャピした感じではなく、  
三十代半ばから四十前後の、大人だけど、相変わらずなことで悩んでしまう類いの。

もう少し若いときなら、  
それは異性でないと見えない、  
新たな視野の広がりと感じただろうけど、  
少し若くない今の僕には、あまり心地よくは感じないのであった。

それはたぶん、いろいろと知ってしまったからかもしれない。

見つめ合うことより、隣にいることの意味を、  
どうにもならないのに、どうにかしようとしたことの絶望を、  
少しずつ、大切にしていたものが、さらさらと落ちていくことを、  
思い出は形を変えながら、いつか答えを教えてくれることを。

つまりは、わかってしまうことの無意味さに、  
うー、あー、ってなってしまうのだ。

そうして浮かんできたのは、  
14才からの付き合いになる、同じ年の友達のこと。

彼女は、僕の一番古い友達だ。

小説の中で、幼馴染み同士のやりとりで、  
" 35才になって、お互い独り身だったら結婚しよう、と、昔、話していた "  
というシーンがあった。  
35才になり、いろいろ葛藤しながらも結婚に向けて付き合い始める、  
という流れになっていくのだけど。

あれはいつだったか、たぶん、二十代の終わりのころだったか、  
14才からの付き合いの友達に、同じようなことを言ったな、と。  
35才じゃなくて、  
「60くらいになって、暇だったら、結婚しよう」と、何かの拍子に言ったのだ。  
まあ、その98%はジョークなのだけど、2%には、  
なんとも言えない気持ちがあったのは、本当だった気がする。

で、彼女はそれに対して、  
「そうだね、そのくらいになったら、縁側でお茶するのもいいかもね」と、  
答えたわけで。

まあ、そんなことを思い出した。

年を重ねていくにつれ、  
どんどんと「想い」に情熱があったときが、遠くなっていく。

その原型は14才ころにあったもので、  
それを彼女は知っていて、  
だから、彼女と話すと、14才のまっすぐな感覚と、  
30代の積み重ねの経験が、ごちゃまぜになる。

お互いに未熟だらけで、  
それを確かめていられるのは、  
心にいいことだなあ、って、思ったりする。

それは僕にとって、「ちいさな光」であるのだと思う。

あ、ラジオについても書きたかったんだけど、  
うまくまとまらないので、割愛。

割愛しないで、話し続けることができるラジオのパーソナリティーって、  
すごいなあって、尊敬するのであった。

# 「東京の街に出て来ました」 垣内ひろし



コミック: 144ページ

出版社: 光文社 (2011/3/19)

**ISBN-10:** 4334976433

**ISBN-13:** 978-4334976439

発売日: 2011/3/19

商品の寸法: 20.8 x 14.8 x 1.8 cm

web上で連載され静かな感動と涙を呼んだポエ漫(ポエム+漫画)ついに待望の書籍化。

東京にいる友達に会いに行くとき、  
いつも少しソワソワする。

そのソワソワは、その友達に対するものではなく、  
「東京」に対する、ソワソワだ。

隣接県に住んでいるというのに、  
今のぼくは、東京が日常ではない。

日常だったときもあって、  
たぶん、そのときの皮膚感覚が、  
まだ心を刺激するから、でもあると思う。

垣内ひろしさんの「東京の街に出て来ました」は、  
もともとブログで発表されたもの。

そのブログを最初に見たときから、  
ずっとハマってしまった。

冒頭の通り、隣接県生まれのぼくには、  
「上京」という感覚は気薄なのだけど、  
気薄なゆえに、憧れているところもある。

似たようなところでいうと、  
方言がないから、方言を喋ることに憧れがあるのも、  
同じかもしれない。

そう、ちょうど東京で働いていたときは、  
「上京」してきた人とよく遊んだりしていたのだ。

その人は今はもう、東京にいないくて、  
東京で会うことはないのだけど、  
今でも、東京に行くと、その感覚が甦ってくる。

そして「東京の街に出て来ました」の雰囲気、  
そのときの感覚にすごく似ている。

垣内さんの「東京」を通じて、  
ぼくは「上京」や「一人暮らし」ではなく、  
それを思い出すのだ。

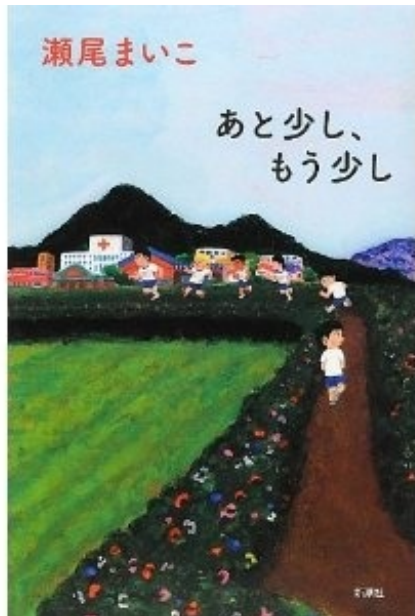
東京は大きなおもちゃ箱。

楽しいことも、せつないことも、  
素敵なことも、間違ったことも、  
ぜんぶしまった、おもちゃ箱。

だから、今でも、ソワソワするんだな。

そんな気持ちになるのです。

October 21, 2012



単行本: 278ページ

出版社: 新潮社 (2012/10/22)

言語 日本語

**ISBN-10:** 4104686026

**ISBN-13:** 978-4104686025

発売日 : 2012/10/22

商品の寸法: 19.6 x 13.8 x 2.6 cm

中学校最後の駅伝だから、絶対に負けられない。襷を繋いで、ゴールまであと少し! 走るの好きか? そう聞かれたら答えはノーだ。でも、駅伝は好きか? そう聞かれると、答えはイエスになる——。応援の声に背中を押され、力を振りしぼった。あと少し、もう少しみんなと走りたいから。寄せ集めのメンバーと頼りない先生のもとで、駅伝にのぞむ中学生たちの最後の熱い夏を描く、心洗われる清々しい青春小説。

「モノがあるから、心の豊さが失われていく」  
ということ、僕は信じてない。

それは、日々進化していくモノについていけない大人が、  
「あのころは、モノがなくても、楽しかった」と言いたいだけの、  
ノスタルジーだと思うからだ。

それと同じように、たとえば、中学生の心の問題などを、  
昔と対比して、深刻になったように思わせる姿勢は、違うと思う。

豊かさを失うのは、大人の方だ。  
それを大人が子どもに押しつけてるだけだ。

瀬尾さんの新刊「あと少し、もう少し」は、  
中学駅伝が、舞台。

特別ではない、6人の男子中学生が、  
襷をつないでいく、それだけのお話。

それだけの話なのに、  
それぞれの想いを知るとき、  
もはや「それだけ」ではなくなっていく。

相変わらず、瀬尾さんが描く中学生は、カッコイイ。

その「かっこよさ」は、決して、  
さわやかとか、優しいとか、モテるとか、  
そういうことではない。

この話に登場する中学生も、

いじめられっこ、ヤンキー、  
お人よし、知的に見せたがり、  
先輩に憧れる後輩、和ませキャラ、

と、単純にカッコイイわけではない。  
しかも、それぞれの内面には、  
様々な葛藤を抱えている。

けれど、それぞれがそれぞれと関わりあうことで、  
それぞれは、自分や「世界」をわかっていく。

思春期は、みんなそうだったのだ。

瀬尾さんは、中学教師だったこともあり、  
そのことを、たぶん、わかっている。

そして、本当に中学生を「カッコイイ」と思っていると思うのだ。

それが、失われていない「心の豊かさ」だ。

自分の心の中に違和感を抱えたり、  
どういう立ち位置で生きていくのかを、  
選べない中で毎日を過ごすことは、理不尽に思うはず。  
その対処法すら覚えかけの中学生の毎日は、  
思っている以上に、しんどい。

そんな中学生が、「豊かさが無い」わけないのだ。  
泣いたり、笑ったり、絶望したり、でも前を向いたり。  
そんな中で生きることは、カッコイイ。

陸上部顧問に「なってしまった」上原先生が、  
カッコ悪くも、少しずつ、誰かに影響を与えていると思うと、  
やっぱり、それもカッコイイ。

人が人のことを「わかる」というのは、  
錯覚なのかもしれない。  
でも、その錯覚で心は動いていくし、  
関わり合って絆は生まれる。

そんな当たり前のことを、  
ぼくらは学んできたはずだ。

それを忘れるような「豊かさを失った大人」では、いたくない。

中学生のときの自分に、  
それを耳打ちされたような、  
そんな気持ちになったのだった。



ちなみに、1区から6区までをそれぞれの主人公を立てて書く感じが、

「風が強く吹いている」のようだなあ、と思った。  
これも映画化されないかな、と密かに期待している。

October 25, 2012



新書: 256ページ

出版社: 竹書房 (2012/12/24)

ISBN-10: 4812493021

ISBN-13: 978-4812493021

発売日: 2012/12/24

商品の寸法: 17.2 x 11 x 1.8 cm

「ぼのぼの」は発表当初より、4コマ漫画でありながら哲学的であると評価され、多くのファンを掴みました。「いちめる?」「しゅりんくっ」「それはヒミツです」「楽しいことが終わるのは、悲しいことが終わるため」「生き物はこまらない生き方なんか絶対ないんだよ」「さァ~どんどんしまっちゃうからね」などの名言が誕生しました。上巻はタレント東野幸治さんが、作者のいがらしみきおに笑いの視点から特別インタビューをしました。生きることが楽になる珠玉の言葉が本書には、たくさん収録されています。あなたの心にも、ちゃんと届きますように。

楽しいことはどうして終わってしまうのか。

よろこびが、終わってしまうということは、  
苦しくなってしまう、ということでも、ある。

いや、苦しいというよりは、  
本当は「わびしい」という感じだろうか。

例えるなら、運動会の終わりのほうの夕焼けとか、  
修学旅行の帰りのバスの中、とか。

あれは、苦しいのではなくて、  
「終わり」ってやつが、わびしかったんだと思う。

スナドリネコさんは、

「楽しいことが終わるのは、苦しいことも終わるためだ」

と、言っていた。

楽しいことも、苦しいことも、始まるし、終わる。

人は、人生のターニングポイントとなるような、  
大きな出会いや別れのことばかりを覚えている。

それは「楽しい」ことであって「苦しい」ことだ。  
「淋しい」ことでもあるし「悲しい」ことでもある。

けれど、覚えていられない、  
ちいさな「出会い」や「別れ」を、  
ほんとうは毎日、繰り返して生きている。

たとえば、すれ違い様、肩がぶつかってしまって、  
「すみません」「いえ、すみません」と言っただけの人とか、  
ひだまりに隠れている、猫と目が合って、  
立ち止まって、また歩き出したり、とか。

はたまた、擦り傷が、いつのまにかふさがって、  
なくなっているってことでさえ。

いちいち感じていられない、「楽しい」「苦しい」「淋しい」「悲しい」を、  
見捨てることに、大人は慣れ過ぎてしまっているのじゃないだろうか。

だから、「苦しいことが終わる」ということも、  
思い出せずにいるのじゃないだろうか。

楽しいときが終わるとき、  
ぼくらは「苦しく」なったわけじゃない。

きっと「わびしく」なっていたんだ。

だから、また「楽しいとき」がやってくるのを、  
信じていられたんじゃないだろうか。

そうすると、楽しいことって、終わらないね。

そうすると、わびしいことも、終わらないね。

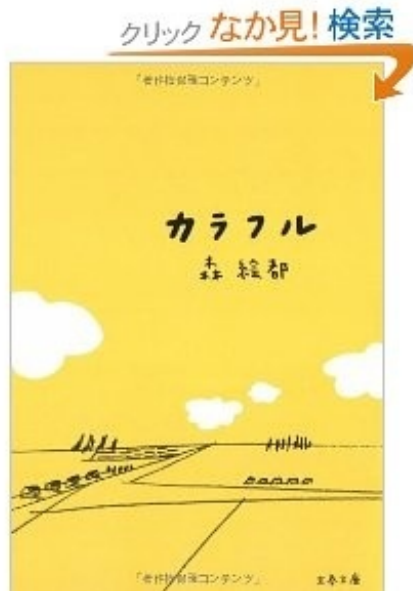
かなしいことも、さびしいことも、終わらないのかな。

でも、それは裏表一体の、  
メビウスの輪の上を、ずっと歩いているってことかもしれないね。

だから、心配はしていなんだよ。

かなしいことは、手をつないでいたら大丈夫だし、  
たのしいときも、手をつないでいたら、たのしいから。

なにか少し困ったとき、  
ぼのぼのの言葉の、ひとつひとつに、触れてみることにしよう。



文庫: 259ページ

出版社: 文藝春秋 (2007/9/4)

言語 日本語

**ISBN-10:** 4167741016

**ISBN-13:** 978-4167741013

発売日: 2007/9/4

商品の寸法: 15 x 10.6 x 1.4 cm

YA文学の金字塔がふたたび刊行! 大きな過ちを犯して死んだぼくは、天使のサポートで少年の体を借り、再びこの世で自分の過ちに気づく修業をする。いったいその過ちって?理論社版の新装版。

映画の出来がよかったので、原作も読みました。

やっぱり原作には、映画で描かれていない部分があり、より深く味わえました。

映画にも映画だけの部分があり、原作とそれを融合させると、新しい味になるような、そんな感じで二度味わえました。

バナナと牛乳、両方好きだけど、バナナ・オレにして、ごくごく飲めた、そんな感じでしょうか。

具体的に言うと、主人公が初めての友達を作る場面。

原作では、一つのエピソードで終わっているところが、映画ではもうひとつがスパイスになって、より「うんうん」とうなずける感じに。

逆に、不倫をしてしまう母親や、利己的だと思っていた父親の、本当の心情は、原作には描かれている。

そんな、バナナ・オレなので、両方、味わえる作品だと、感じました。

そして、そんな原作の中で、深く心に刻まれるフレーズがこれ。

”人は自分でも気付かないところで、だれかを救ったり苦しめたりしている。”

ぼくには、とてもよく人生設計を考え、行動して、ちょっと不真面目だったりしながら生きている友人がいます。

ぼくは彼の計画性の高さに舌を巻きながら、計画通りいってない彼の人生に、愛しさを感じてしまいます。

それが、ぼくを救っていたりもするし、逆に苦しいと思うときもあるのです。

人は人の気持ちを操縦できる魔法は持ってはいません。けれど、人が人と関われば、意思がある、ないに関わらず、救いになったり、苦しみにったりするものです。

それでいいんだよ、とこのお話は教えてくれます。

なぜなら、存在しているということは、それだけで、誰かに影響を与えているということだからです。

ぼくやあなたもまた、誰かの救いや苦しみになっていることでしょう。

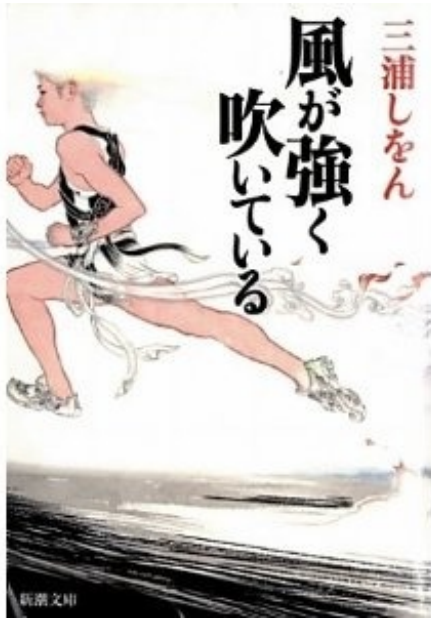
それは、生きているからです。

生きているから、バナナ・オレがおいしいと感じることもできるのでしょう。

あ、なんだかバナナ・オレを勧めているかのようになっていました。

この本の表紙がそんな色をしていたから、という理由だけでもないのですが。

『カラフル』、君に読んでほしいです。



文庫: 670ページ

出版社: 新潮社 (2009/6/27)

**ISBN-10:** 4101167583

**ISBN-13:** 978-4101167589

発売日: 2009/6/27

商品の寸法: 15.2 x 10.8 x 2.2 cm

箱根駅伝を走りたい—そんな灰二の想いが、天才ランナー走と出会って動き出す。「駅伝」って何?走るってどういうことなんだ?十人の個性あふれるメンバーが、長距離を走ること(=生きること)に夢中で突き進む。自分の限界に挑戦し、ゴールを目指して襷を繋ぐことで、仲間と繋がっていく...風を感じて、走れ!「速く」ではなく「強く」—純度100パーセントの疾走青春小説。

これは女性が描く、男の物語だと改めて思う。

なんというか、男臭くない。  
描く男は男っぽくはない穏やかさを持っているが、極めて情熱的。  
ぼくは、こういう感じの情熱の放ち方が好きだ。

泥まみれの男臭さも好きだし、引き込まれる。  
でも、その輪の中で過ごすのは、  
けっこう疲れるものだ(あくまで個人的な経験です)。

勝つとか負けるとかじゃなく、  
ただ走るってということがどういうことなのか。  
そういう本質を問いかけながら、自分や仲間のために賭けるような。  
そういう雰囲気、いい。

そんな中、少しばかり恋愛模様もあるのだけど、

その描写はやはり、女性が書く言葉だとハッとさせられる。

たとえば、こんな言葉。

これは勝負ではない。葉菜子の心は、葉菜子のもの。  
ジョージの心はジョージのもの。  
走（カケル）の心が、走だけのものであるのと同じように。  
誰も奪ったり曲げたりすることのできない、  
あらゆる尺度から解き放たれた領域だ。

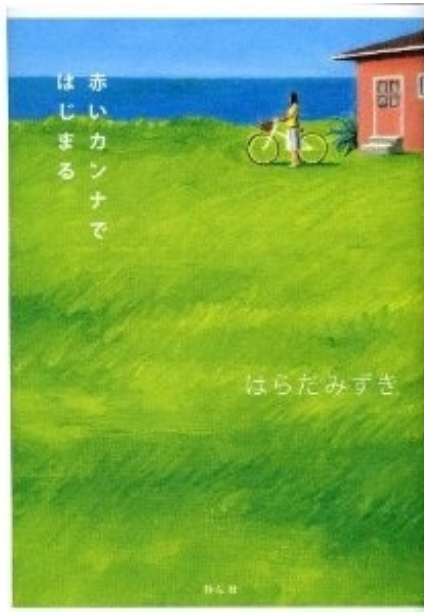
526ページより

走が葉菜子のことを好きでありながら、  
好きだと思う以上のことを教えてくれた、葉菜子への気持ちを、  
心の底から解放する言葉だと、ぼくは思う。

こんな気持ちのとき、  
はじめてちゃんと愛することができるのかもしれい。

October 22, 2010

## 「赤いカンナではじまる」 はらだみずき



da 「

単行本: 265ページ

出版社: 祥伝社 (2009/10/27)

言語 イタリア語, スペイン語, 日本語, フランス語, 韓国語, 英語, 中国語, ドイツ語

**ISBN-10:** 4396633297

**ISBN-13:** 978-4396633295

発売日: 2009/10/27

商品の寸法: 19.2 x 13.2 x 2.6 cm

その人は涙を流していた。涙を流していたのは、わたしと同じ書店員だった――。

ある日、書店員の野際は、文芸書棚を担当している保科史江が涙を流しているのを、出版社の営業マン、作本とともに目にする。後日、退職を願い出る彼女の涙の理由とは、何だったのか。関西出張で偶然彼女と出会った作本が、意外な秘密を聞き出してくる……。(「赤いカンナではじまる」)

期待の新鋭がおくる、書店員、編集者、出版社営業マンたちの「過去との再会」を描いた恋愛小説集。

「絶対」という言葉を使うときの、  
気持ちの純度は相当高い。

「一生のお願い」ほどの純度の高さだ。

「一生のお願い」は、小学生のときに使いすぎてしまった。  
使いすぎてるというのに、その純度は毎回、高い。  
小学生、おそるべし。

でも今なら、「一生のお願い」を簡単にはできない。  
それが叶うか叶わないかに関係なく、  
最後の切り札くらいに慎重になる。



それは、純度の高い願いが、徐々に少なくなり、  
純度の低い想いで使うと、バチが当たるような気がするから。

「絶対」というのも、そういう感じがする。

「絶対に忘れない」、そう思ったときに、  
純度が低いなんてありえない。

だけど、「一生のお願い」を使いすぎてしまって、  
どれが「一生のお願い」かわからなくなってしまったように、  
「絶対」だったものも、「絶対」じゃなくなることがある。

それが、ときの流れ。

だけど、

「暗闇の中で見た光は、絶対に忘れないよ。  
たとえ今が光に包まれて、その光が見えないとしても」

友達がそう言っていた。  
その友達は、とても苦しい思いで生きていたけれど、  
苦しいときに助けてくれた、そのときのことは、忘れないのだと、言った。

その純度は、限りなく澄んでいる。

「絶対に忘れない」。

それだけ心に強く刻まれる思いが、  
この先、いくつもあるなら、  
心は純度の高いまま、澄んでいられるのかもしれない。

October 12, 2010

# 「トリツカレ男」 いしいしんじ



文庫: 160ページ

出版社: 新潮社 (2006/03)

ISBN-10: 4101069239

ISBN-13: 978-4101069234

発売日: 2006/03

商品の寸法: 15 x 10.2 x 1 cm

ジュゼッペのあだ名は「トリツカレ男」。何かに夢中になると、寝ても覚めてもそればかり。オペラ、三段跳び、サングラス集め、潮干狩り、刺繍、ハツカネズミetc.そんな彼が、寒い国からやってきた風船売りに恋をした。無口な少女の名は「ペチカ」。悲しみに凍りついた彼女の心を、ジュゼッペは、もてる技のすべてを使ってあたためようとするのだが…。まぶしくピュアなラブストーリー。

「愛って、なんですか」

と聞かれたときは、

「とりつかれることです」

と、答えることにしてる、ゆひです。

まあ、そんな質問、されることはないのだけれど、  
ぼくにとっての愛の教科書と言っても過言ではない、  
いしいしんじ・著「トリツカレ男」。

オペラ、三段跳び、サングラス集め、  
さまざまなことにとりつかれては、  
街の人を愉快にする、ジュゼッペ。  
彼が、恋をしたのは、ペチカ。  
ペチカにとりつかれたジュゼッペは、

悲しみでくすんだ彼女の心を、  
あらゆることであたためようとする。  
そんなお話。

何度読んでも、愛だと思う。  
そして、すこしばかり、とりつかれることをためらっているぼくの心も、  
ジュゼッペによって、ペチカによって、  
タタン先生によって、はたまたハツカネズミによって、  
後押しされる。

”ブレーキの壊れた自転車で、まっすぐな道をすべっていく”

そんな恋、そんな人生、  
まだできる余地が心に残されているなら、  
それを選ぼうとする自分でありたい。

ジュゼッペ、きみの愛は、海より深いよ。

ところで、この作品は舞台化もされてます。

見たかったなあ。

映画化するなら「ジュゼッペ」というイタリアっぽい名前のことだし、  
ロベルト・ベニーニ監督作品で！

で、2012年に、舞台を観れました。  
こちらは、舞台を観たときの感想。

たとえば、風が吹いてきただけで、  
その景色の全部を、心と体中で、  
なでていくような時代があった。

その色とか、匂いとか、温度とか、音とか、  
そういうものにつつまれるような。

それが傷になることも。

思春期のころは、そんな感覚で生きていた。

大人になり生きることに慣れてくると、  
傷を癒すのが上手になる。  
それは、同時に、思春期のころの感度が、  
鈍くなるってことでもある気がする。

だから、ときどき確認しておきたい。

信じたいもの、光になるもの、道しるべに思うもの。

僕にとって、その中の一つが、  
いしいしんじの小説「トリツカレ男」なのだ。

その、舞台版が公演されるということで、  
迷わず飛び込んで行ってきた。

2007年に初演が行われていて、  
それを知ったのは2008年で、  
観れなかったのが悔しかったのだ。

2012年に観れるとは、やっぱり生きてるといいことあるなあ。

星野真理と金子貴俊が新たなキャストとして出ていたけれど、  
予想を裏切ることなく、楽しめた。

『トリツカレ男』は、こんなお話。

童話か寓話かファンタジーか、  
そんな雰囲気、なんでもとりつかれてしまう、  
”トリツカレ男”のジュゼッペの物語。

そうして、ジュゼッペが「恋」にとりつかれたとき、  
ただただ、愛することの毎日が続く。

そこにある想いは、ただ相手に「笑ってほしい」ということだけだ。

そのためにできることのすべてに、  
ジュゼッペはとりつかれていくのだ。

それは思春期に信じていたような、愛のかたち。

これをあげるから、それをちょうだい、  
そういう取引をするような恋じゃなく、  
ただ、愛するということ。

笑いを交えながら、そのピュアな想いを描いていく。

そう、舞台では、特にこの「笑い」に力を入れていたように思う。

せつない想いの中に、小ボケが混じって、  
「笑い泣き」って感じになる。

やっぱり、泣けるだけじゃなく、笑えるだけじゃなく、  
笑い泣き、泣き笑い、というのが、たまらなく好きだなあ。

ロベルト・ベニーニしかり、三谷幸喜しかり、クレヨンしんちゃんしかり。

たぶん、僕にとって、それが「景色の全部をなでること」なのだと思う。

物語が終わると、カーテンコールが3回も起こり、  
「もう、何もありません」と言わせちゃうくらい、拍手が続いた。

気持ちの上ではスタンディングオベーションだ。  
する勇気はなかったけれど。

東京、名古屋、大阪での公演なので、  
お近くの方は、観に行かれて損はないと思います。

原作を読んでいなくても、ジワジワと胸の奥をなでる、  
そんな舞台なんじゃないかな、と。

一言で言うと、『LUCKY SAD』。

うん、まさに、だね。



## 読書カルテ

<http://p.booklog.jp/book/27771>

著者：ゆひ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/yuhibook/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/27771>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/27771>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ